心相觸れてこそ(一)[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　李光洙

作者の言葉

「すめらぎの神と君とにつらなりて　やまともこまもひとつなるかも」

私はかう祈る心持でこの物語を書きます。やまととこまとは一つにならねばなりませぬ。しかしそれは力づくでとか、いやいやながらでなつてはならないのです。心と心が觸れ合ひ慕ひ合ひ融け合つての一つでなくてはならないのです。さう云ふ一つの場合を描かうとするのがこの物語の意です。

同じみ神の氏子です。同じ大君の赤子です。やまともこまも融け合はなくて何うしませう。しかし實際においてはそれは決して、なみなみの努力で出來ることではないと思ひます。おのれを空しうすると云ふことは、凡夫の悲しさには、決してなまやさしいことではありませぬ。しかし、やまともこまも、小我を忘れて大我に殉じようと云ふ決心さへあれば、お互に一つに融け合はねばならぬ因果に眼醒めさへすれば、またさして難かしいことでもないと云ふのが私の信念です。知幻即離とでも云ひませうか。眼醒めることが肝要です。この小さい、拙い物語が、内鮮一體の大業に塵程の貢獻をでもなし得るとすれば私の願は叶ふのです。（作者）

奇しき因緣

　とうとう雨は土砂降りになつて了つた。風さへ岩壁を叩き谷間に吼えて居る。朝から降り積た雲はどろどろな流動體になつて、黄昏の色に融け合つて灰色のつ天地に薄明を投げて居る。

　金忠植は岩壁傅ひに仁壽峰を西の方に下りて居た。リユツクサツクやジヤンバーはびしょぬれで、のやうな雨の雫が顔を叩くので眼があけられない。忠植は始は壯快さをさへ感じたのであるが、だんだん一種の恐怖感に打たれざるを得なかつた。

　ふと忠植の耳には、

「お兄さま、お兄さま」

と呼ぶ聲が聞えたやうな氣がした。しかもそれは女の聲であるやうな氣がした。

「はてな」

忠植は立ち止まつて、耳を澄ました。

「お兄さま、お兄さま」

　たしかに人間の聲であつた。

　遭難者だと忠植は思つた。仁壽峰の裏コースはハイカー達の難所の一つだ。この強風でロープが外れたのかも知れぬ、と思ひながら忠植は聲のする方へと急いだ。今までの難澁や恐怖が吹き飛ばされた様で足が輕かつた。

　忠植は、声の來る方向を見きはめるために、數歩下りては立ち止まり、又數歩上つては立ち止まつた。雨脚や黄昏やで二三間先も能くは見透せなかつた。

「あッ、あれだ」

　忠植は巖壁の下に二つの姿を發見して、嶮しさを忘れたやうに一氣に、一つの崖をかけ下りた。

「何うしたんですか」

　忠植は仰向けに寝て居る若い男と、その傍で失神したやうに、「お兄いさま」と呼んで居る登山服の女の姿を見比べながら話しかけた。それは東武雄とその妹文江とである。

　文江は忠植の聲に顔を上げて振向いた。けれども何も云はなかつた。

　忠植はあたりの様子で、とぐろを巻いて居るロープや、ほうり出されたリユツクサツク等で、大體想像が付いた。男はロープから振り落されて人事不省になつたのだと思つた。

　忠植は、文江を押し除ける様にして、寝て居る武雄の上衣のボタンを外して、その胸に耳を當てた。心音は聞えた。それから頭や、脊椎等をざつと調べて大した傷のないことを確めた。

　忠植は、

「かうしてちやいけない、ともかく人家まで行かなくちやあ。あなたは歩けますか」

と云ひ云ひ、片手を、武雄の首の下へ、片手を兩膝の下へ入れて、看護婦が患者を運ぶやうな格好で先に立つた。

　文江は、武雄のリユツクサツクやピツケルやロープ等拾ひ集めて、忠植の後を追つて歩き出した。

　忠植は十數歩無言に歩いてから、後を振り向いて、

「お嬢さん、そんなもの持つてては歩けやしませんよ。もうこんなに暗くなつたし、それにとても滑りますからね。その荷物は、あの岩の蔭にでも入れてお置きなさい。明日雨が止んだら取りに來ませう」

と命令的な調子で文江にいつた。

　文江は

「はい」

と云つて素直に忠植の云付通りに、兩手に下げて居つた荷物を、二三歩脇にある大きな岩の蔭につつ込んで了つた。

「うむ、それで好い」

　忠植は武雄を抱へたまゝ又歩き出した。谷底には水が流れて居るが、その水の底は一面氷で、しかもところどころ隠れた岩角が突き出て居るから實に危い。足さぐりでやつと一つ一つと足の置き場を探さなくてはならない。

　だんだん闇は濃くなつて來る。身體は寒さで殆んど感覺を失つて居た。

「後十町も往けば道に出られるんだがな」

と忠植がつぶやいて居るのを聞くと文江は益〃心細くなるばかりであつた。

　とうとう第二の不幸が起つた。それは文江が躓いて、岩角にしたゝか膝頭を打つて歩けないやうになつたことであつた。

「どうぞ、あたしは、お構ひにならないで、兄だけをお助け下さいまし」

　文江は忠植に、かう訴へるのであつた。

「そんな馬鹿なことが出來ますか」

　忠植は一人を數十歩運んでは、後へ戻り、又一入を數十歩運んでは後へ戻つた。

　忠植もへとへとに疲れた。足下のしつかりさが減じて、時々ひょろひょろして來た。文江はそれが氣の毒でもあり、濟まなくもあつたが何うすることも出來なかつた。三人とも死ぬのぢゃないかと思はれた。雨は止まない。

　最初は文江は忠植の言葉の發音の朝鮮訛に些か不安を覺えたのであるが、一時間足らずの中にその不安は全然消滅して了つて、親身の兄か何んかのやうな、頼もしさとありがたさで胸が一杯になるやうであつた。殊に忠植が文江を抱いて運んで居た時に、片脚を踏み外して、二人諸共轉ばうとした所を、文江だけは安全に地面に下ろして自分だけが、ズボンが裂けて血が滲み出る程の怪我をした時等は、忠植に抱き付いて泣きたい位であつた。

　その晩遅くである。雨は相變らず降りしきつて居た。忠植の家のに寝かされて居た東武雄は、意識を戻して眼をあけた。

　一番最初に武雄の眼に映つたのは朝鮮風の天井と釣ランプであつた。次に武雄の眼に這入つたのは忠植の妹の石蘭である。石蘭は紺のに白キャラコのを着て居り、兩方の袖を捲くし上げて白い前膊の半分以上を露はして、朝鮮風の眞鍮製の盥の水に、タオルを浸してはこれを搾り、武雄の額を冷やして居たことが、一目で武雄にも解つた。石蘭は武雄が眼をあけたのに氣が付かないらしかつたので武雄は直ぐ又眼をつむつて了つた。

　石蘭は武雄に取つては、始めて間近に見る朝鮮人の女子であつた。がそれよりも自分は一體何うしてこんなところに來て居るのだらう。武雄は、その時刻が如何なる時刻であるかゞ解つた。卽ち夜であると云ふことである。次の瞬間に武雄は、表では雨が降つて居ることや、又風が相當強く吹いて居ることも解つた。

　雨や風の音で武雄には仁壽峰で、風にロープを吹き飛ばされて、岩に踏み付けた足をさらはれて身體がふわりふわりと宙に浮いたことや、何かしたゝか後頭部をぶつつけたことなど思ひ出されたが、その時から今までの間の記憶はブランクであつた。

　武雄は頭が痛いのを感じ、又肩の所や腰の所も痛く身體が重く床にくつついたやうで動けないと云ふことも感じた。併し何うして、こんな朝鮮人の家に來て寝るやうになつたのだらう。あの朝鮮人の娘は抑〃何者だらう。それは何うしても解らなかつた。

　次に武雄は妹文江のことを思ひ出した。あれは何うしたのだらう、と思ふと何んだか不吉なことを感じて又眼をあけて室内を見廻はした。武雄はランプの向側に、黒檀張りの朝鮮箪笥の直ぐ前に、文江が胸のところまで赤い襟のついた朝鮮蒲團をかけて、顔だけを此方に向けて、眠つてゐるのに氣が付いて、始めてほつとしたが、文江が上體に着て居る朝鮮人の女の上衣に眼がくと妙な氣持がした。文江が朝鮮服を着るなんて、そんなことはあり得ないことのやうに思はれてならなかつた。

　併し又、次の瞬間に驚いたのは、自分の身體に纏つてゐるのも白い朝鮮服であつたことである。武雄は一瞬間不愉快さをさへ感じたのであるが、自分達が、さる朝鮮人に救はれて、今此處に來て居るのかと思ふと何んだか涙ぐましくなるのを禁じ得なかつた。

　武雄がこんなことを考へて居る中に、石蘭は武雄の額のタオルを換へた。石蘭は上體を前に乗り出して、自分の着物が武雄の身體に觸らないやうに氣を付けつゝ、兩手でそうつと武雄の額の上の温まつたタオルを取り除けてそれを盥の水に浸し、既に浸してあつたタオルを、なるべく水音のしないように搾つて、又上體を前に屈めて兩手で武雄の額の上に、そのタオルを載せ、一寸、あちこちと押へて、タオルが丁度好い具合に置かれるところに置かれたのを見届けて、元のやうな端坐の姿勢に反るのであつた。武雄は一から十まで、この見知らぬ朝鮮娘のすることを見て居り感じて居るのであつた。

　時計が一時を打つた。それでも石蘭は同じゃうなことを繰返しては、同じやうな姿勢に戻るのであつた。

　武雄はもうこれ以上沈黙してはゐられないやうな氣がし出した。何んとか一言物が云ひたかつた。第一に「ありがたう」と沁みじみ云つて見たかつた。

　つひに武雄は眼を大きく見開いた。

　武雄が眼をあけたのが今度は石蘭の眼に止まつた。二人の視線がかつちり行き逢つた。

「何んと素直な優しい眼だらう」

　これが石蘭に對する武雄の最初の印象であつた。一つも悪いことは宿つたことのないその心が感ぜられるやうに武雄には思はれた。ことに石蘭が次の瞬間、込み上げて來る驚きと喜びに堪へ兼ねたやうな、その表情には聖なるものをさへ武雄は感じたのであつた。

「お嬢さん、ありがたうございます」

これが武雄の最初の言葉であつた。

「まあ」

と云つたゞけで石蘭は胸が閊へて物が云へなかつた。その大きく開いた眼には喜びの涙が輝き、息遣ひが激しくてのが揺れて居た。

「妹は何うですか？」

と武雄はもう一度話しかけて見た。彼の女には自分の云ふ日本語が解らないのではないだらうかと氣遣はれて、石蘭の口下に眼を注いだ。赤味を帶びた悧發さうな唇であつた。

「まあお氣がおつきになつて」

と石蘭は後が續かなかつた。

「妹は怪我してゐないんですか」

と云はれて、やつと石蘭は胸の騒ぎを押へた。

「お妹さんは岩角にお膝をぶつつけられたさうで、腫れていらつしゃいますけど、大したことはございませんの。つひさつきまでお兄さまの御容態を、心配していらつしゃいましたけれど」

「あ、さうですか」

　武雄は妹の寝顔をもう一度眺めて、ほつと溜息をついた。

「お痛みは如何でございますか」

　石蘭はもう平静に歸ることが出來た。武雄は石蘭の日本語の鮮やかなのに、これは本當に朝鮮人の娘だらうかと疑ふ位であつた。一體何處が變つてゐるのだらう、何處が朝鮮人的なところなのだらうと、武雄は石蘭を見凝め見凝め考へた。唯一の違は、彼の女の着てゐる着物だけのやうであつた。その言葉にしろ、禮儀にしろ、顔形にしろ何一つ變つたところはないではないか。ことに見知らぬ人に對する、その美しい心！一體何處に變つたところがあるのだらうか、と武雄は、朝鮮人は劣等だと口癖のやうに云つてゐた父大佐や母の氣が知れないとさへ思つた。

「いや、もう大丈夫です。もつとも頭が少し痛いんですけれども、こんなにしつかりしてゐます」

　武雄は兩手を高く上げて見せた。それから起き上らうとするかのやうに頭を枕から上げようとした。

「あら、いけませんわ。お身體をお動かしになつては」

　石蘭は慌てゝ、手を延ばして武雄の胸を蒲團の上から押へた。

「お動きになつてはいけないと兄が申して居ります。お熱をお出しになつては大變だから、じつとお休みになつていらつしやらなくては、お惡いさうでございますから」

「お兄さま？」

　武雄は、この娘の兄と云ふのは何う云ふ人だらうかと思ひながら、しかし何んと云つて好いのか解らなかつた。

「はい、さき程まで兄が、注射をして差上げたり、お介抱申し上げて居りましたけれども、兄も少し熱を出しまして―」

　こゝまで云ひかけて、石蘭は、そんなことを云ふんでなかつたと後悔するやうに、口を喋んで眼をふせた。

「さうすると、お兄さまはお醫者さんですか」

「は[あ]、一昨年大學を出たばかりで」

「一咋年大學？」

「はい、今大學病院の外科に勤めて居ります」

「大學と申しますと、城大ですか」

「は[あ]」

「では豫科から」

「は[あ]」

「さうですか、では數年間僕と同じ學校にいらつしやつた譯ですね」

　武雄は、しばし感慨に堪へないやうに眼をつむつた。一昨年卒業なら、醫學部は法文學部よりも年限が一年長いから忠

植は武雄より二年も先輩であつた筈だ。武雄の組にも朝鮮人の學生が十數人居たことは居た。しかし、他の内地人の學生

達がさうであつたやうに、武雄も朝鮮人學生とは殆んど交際がなかつた。朝鮮人學生たちが、教室やなんかで、自分達同

士朝鮮語でべらべらしゃべつてゐるのを見る度に、武雄は毆つてやりたい程不愉快な感じのしたことを思ひ出した。何んだか下等な奴等のやうで、見たゞけでも胸がむかむかするのであつたし、内地人同士集まつたところでは、しばしば朝鮮人學生の無作法なことや、生意氣なことや、僻根性など扱き下ろしたのであつた。それで、朝鮮人は何うしても胸襟を開いて、友達になることは出來ないものときめて居つた武雄であつたし、武雄の友人は、大抵は同じ部類に屬してゐた。内地人學生でたまに朝鮮人學生と親しくしてゐる者があると、そいつまでも下司びて、憎らしく見えた。武雄は今眼をつむつてさう云ふことを考へてゐたのであつた。

「この娘の兄と云ふのは、何う云ふ朝鮮人だらう」

　武雄は、重大な關心を以つて、この問題を考へざるを得なかつた。

　石蘭は、もう一度、武雄の顔のタオルを換へてから

「一寸、兄を見てまゐります」

と一禮して室から出て行つた。

　古い障子は、石蘭がそのに、餘程氣を付けたのにも拘はらず、妙な音を立てゝ軋つた。その音で眼を醒ましたのであらう、

「お兄さま」

と文江は上半身を上げた。

「文江！」

　武雄は感激的な聲で呼びながら、文江を見た。

「まお、お兄さま。何時お氣がおつきになつたの？」

「さつきから」

　文江は起き上らうとしたが脚の痛みで何うすることも出來なかつた。

「起きるな、文江。膝が腫れて居るさうぢゃないか」

「起きられないわ。でもお兄さま。まあ好かつたわ」

　文江は嬉しくて堪まらないやうであつた。

「死んだとでも思つてゐたのか」

「だつて、あすこんとこから、お兄さまがづしんと落ちてから、いくらわたしが、お兄さま、お兄さまとお呼びしてもおわかりにならないんですもの。あたし何うしようかと思つたわ。あの金さんのお兄さまがいらつしゃらなかつたら、お兄さまも文江も今頃何うなつてるかわからないわ」

　文江は仁壽峰裏のことを思ひ出して、身慄ひするのであつた。

「ぢや今のお嬢さんは金さんと云ふのか」

「エ、金さんよ。金石蘭さんて云ふの。石の蘭よ。美しいお名前でせう。お兄さま、石蘭さん見た？」

「見たどころぢゃないよ。今までこゝで、兄さんの頭を冷やしてて下さつたんだよ」

「好い方でせう？」

　文江はにつこり笑つて見せた。

「うむ、親切な人だね」

　武雄は、石蘭の親切さが犇々胸に迫るのを感じた。

「お兄さんもよ。金さんのお兄さまは勇士よ」

「勇士？」

「エエ、勇士だわ。お一人でお兄さまと文江とを仁壽峰から此處まで抱いていらつしゃつたのよ。文江もこんなに膝頭を打つて歩けなくなつたでせう。それを代る代る運んで下さつたの、四時間もかゝつたのよ。それに御自分も、とうとう躓いて怪我をなさつたの。文江をかう抱いたまゝ。それでも文江には一寸も怪我をおさせにならなかつたの。御自分はズボンが破けて、血が滲んでいらつしゃるのに。まつ暗でせう、それに滑るつたらないの。本當にありがたかつたわ、濟まない位」

　文江の眼には涙が光つた。

「さうか。そんなにして僕達を此處に運んで下さつたのか」

　武雄も眼頭が熱くなるのを感じた。

「そればかりぢゃないのよ。このお部屋は奥座敷でせう、お母さまのお部屋なの。それを、私達が寒からうと云ふので、ここのお父さまがこのお部屋を私達の部屋に當てるやうにお云付けになつたんですつて、そして、こゝのお母さまは火の氣のなかつた向ふのお部屋に火を焚かせてお移りになつたのよ。お蒲團も餘分のものがなかつたやうだつたわ」

「さうか。濟まないな」

「本當にそれは親切な方達よ。お兄さまのも、文江のも、ほらこの着物ね、これ着換へさせて頂いたの。あたしたちのはすぶ濡れでせう」

　武雄は、「これは何を意味するのだらうか」と深く考へずにはゐられなかつた。

　武雄と文江とはしばらく沈默の中に銘々の考に沈んでゐた。何んだか人生の新しい一面を見せ付けられたやうな氣がしてならなかつた。少くも朝鮮人に對する認識をし直す必要があると思はれたし、同時に人生と云ふものの認識をも強いられたやうな氣がしたのであつた。

四五日經つて武雄と文江は自動車に乗つて忠植の家から、漢江通の父の家に歸ることが出來る程よくなつた。若し強いて歸らうと思へば、もつと早く歸れぬでもなかつたが、武雄も文江も何んだか、金の家から離れたくなかつた。金の家に居た方が早く直りさうでもあつたし、又金一家の者の心盡しをむげに斷つて歸るのが、とても濟まないやうにも思はれた。も一つは、武雄や文江の恩人たる忠植の熱の下るのを見届けてからでないと、後髪を引かれるやうで、金の家を出るに忍びないのでもあつた。

　四五日金の家にゐる中に、金一家のものとは、もうよそよそしいことなく、家族のやうに馴れて了つた。罪のない冗談さへ云ひ合ふやうになつてゐた。

　忠植の父は、昔の漢學者を偲ばせるやうなきつさがあつたが、同時に漢學者的な奥床しさもあつた。

　忠植は多分に父の性質を承けついでゐて、無口ではあるが、その無言の中に賴母しい氣心が籠つてゐた。

　石蘭は、武雄の眼には、理想的なタイプの女のやうであつた。柔かくて、はきはきしてゐて、つゝましやかで。若し強いて物足りないところを探すとしたら、感情の動きを一向露はさないと云ふことであらう。その點に於いては舊式の日本女性よりも、もつと固いやうに武雄には思はれた。併し、その眼や聲から十分石蘭の心の暖かみを感ずることが出來るやうであつた。有體に云へば武雄の心は石蘭の精紳の美に囚はれてゐたのであつた。

「兄さま、石蘭さんに心を引かれていらつしゃるのね」

と文江から云はれた時に、武雄は顔のほてるのを感じて、それを否定しようともしなかつた。

「環境のせゐかも知れぬ。冷静に考へ直さう」

　武雄は何邊もかう云ふ風に自分に云ひ聽かせるのであつた。

　武雄達が忠植の家から歸る時は好く晴れて居つた。例の大雨で、未だ濕つて居る田圃や山には今にも蒲公英位は萠出しさうで、急に春めいて居た。金の家のある、佛光里の前を流れる小川はちょろちょろと昔を立てゝゐた。

　武雄は一人で歩いて三町ばかりもある自動車の止まつた義州街道まで出られたが、文江は未だ膝の痛みが取れなくて忠植の肩に縋つて、跛を引き引きやつと歩ける位であつた。

「さやうなら」

「さやうなら」

と四五日間に、お友達になつた村の子供達が武雄や文江の前後を擁して別れを惜しんで呉れ、老人や若者達も、十數人も田圃の向側まで見送つて呉れた。

「お世話さまになりました。ありがたうございました」

と武雄と文江が別れの御挨拶をした時に、忠植の父や母は表庭まで見送つて親のやうな愛情を示して呉れた。

「金君、ありがたう。近いうちに文江と二人でお迎へに來るからね、石蘭さんも御一緒に是非僕の家へ遊びに來たまへ」

　武雄は自動車に乗る前に、忠植の肩に、もう一度手を掛けた。

「金さん是非いらつしやいませ。石蘭さんもいらつしやるのよ。お迎へにまゐりますからね」

　文江も同じやうなことを云つた。

　自動車は動き出した。

「さやうなら」

「さやうなら」

　忠植や石蘭は、武雄達の自動車が碌磻里の坂を越えて見えなくなるまで手を擧げたり振つたりして、見送つた。

「さあ歸らう」

　忠植は武雄達の自動車の消えた方角を、何時までも何時までも見凝めてゐる石蘭を促した。

「好い人達ね」

　石蘭はしんみりした面持で忠植を見た。

「本當に好い人達だ。素直だね」

「ほんと」

　忠植も石蘭も内地人と近付きになつたのはこれが始めてゞあつた。この人達も内地人に對する認識をし直さなくてはならなかつた。

忠植と石蘭は無言で街道を歩いてゐた。二人とも心がになつたやうで淋しかつた。家に歸つたら武雄や文江の匂がするやうで忠植も石蘭も、たまらないなつかしさを感じた。

心の觸れあひ

　陸軍の星を附けた一臺の自動車が義州街道を疾驅して碌磻里の駐在所の前に止まつた。自動車から降り立つたのは東陸軍大佐で、武雄や文江の父であることは云ふまでもない。

　大佐は小柄ではあるが精悍な面相であつた。大佐がつかつかと駐在所内に這入ると、中にゐた部長や巡査達が慌てゝ威儀を繕つて、舉手の禮で大佐を迎へた。

　大佐は名刺を出して叮嚀に部長の前に置いた。

「佛光里へ往くのですが」

と大佐は重々しく口を切つた。

「は、佛光里は直ぐそこであります。十四五町しかありませんが自動車道はございません。何か御用で？」

　これは部長の答であつた。

「は、金永準氏のところへまゐるのですが」

「金永準でございますか」

　部長は怪訝な顔をした。

「金永準つて何う云ふ御仁ですかな」

「金永準つて有名な不逞朝鮮人です」

「不逞朝鮮人？」

「はい、併合以來永い間海外に放浪致しまして、滿洲事變直後吉林でつかまつて、十年徴役に處せられて、昨年やつと假出獄になつたもので」

「あ、あの金ですか」

　大佐も思ひ付いたやうに肯いた。

「は」

「伜や娘が北漢山で遭難しましてな、あの大風雨の日でしたが、金永準さんの御子息の醫學士とやらに助けられて四五日も御世話になりましたので、御禮に往く譯ですが」

「ああ左様でございますか。何んなら御案内申上げてもよろしうございますが」

「さうして頂ければ甚だ結構ですが、誰か小使でも一人拝借出來ないもんでせうか」

「は」

　部長は傍にゐる巡査を顧みて

「おい李君、君御案内申上げて呉れたまへ」

「はい、どうぞ」

　李巡査は急いで佩剣を付けて外套を着て先に室から出た。

　自動車は走り出して、數分間で止まつた。自動車が止まつたところは、武雄と文江が、忠植や石蘭と二三日前別れを惜んだところである。

　大佐は李巡査の後について歩き出した。直ぐ佛光里の村が見えた。瓦葺も二三軒はあるが、他は皆藁葺の百姓屋で如何にも貧しさうに見えた。

　大人は皆仕事に出たのであらう、學校にも行けぬらしい子供達が、穢い装をして、物珍しさうに、又怖さうに、遠巻に大佐と李巡査について來るのであつた。大佐は内地の農村と思ひ比べて、朝鮮農民の生活程度の低さを、こと新しく感ぜざるを得なかつた。この人達が日本國民として國を背負つて立つ力量を發することが出來るだらうか。軍で朝鮮人徴兵問題や、志願兵制度問題等が論ぜられるたびに、東大佐は、いつも反對の態度を取つた。劣等な朝鮮人を國軍内に包容することは、軍を増強する所以ではない、かへつて悪影響を及ぼす憂があると云ふのである。

「朝鮮人に戰爭なんか出來るものか。第一愛國心に缺けてゐるぢゃないか。それに道義觀念が乏しいぢゃないか」

と云ふのが、東大佐の持論であり、若し何うしても朝鮮人を兵として取るなら、それは輜重に限らるべきであると云ふのであつた。

　武雄や文江が金一家の人達の人格を稱揚するのを聽いても、大佐にはそれがそのまゝ受け取れはしなかつた。未だ若い武雄や文江が、恩を蒙つたと云ふ純情から金一家の者を買ひかぶつてゐるのだと思つた。

　しかし世話になつたからは、感謝の意を表するのは禮である。大佐は百圓紙幣一枚を封筒に入れて軍服の内ポケツトにしまつてもつて來たのだ。これなら金一家のものは大喜びだらうと思つたのだ。

　大佐は金永準の家の前に立つた。藁葺の如何にも古ぼけた家であるが、庭先の掃除は仲々行き屑いてゐると思はれた。

　李巡査が門の前に立つて、

「イリオナラ」

と朝鮮語で呼ばはつた。犬は吼え立て、子供達は段々馴れて、怖さもなくなつたと見えて、大佐の佩剣や、顔までも、じろじろのぞいてゐた。

　時代じみた「忠」、「孝」の字の附いた板張の門が開いてあらはれたのは石蘭であつた。例の白い上衣の袖を巻くし上げて、赤くなつた手を前掛で拭き拭き出て來たのは洗濯物の最中であつたらしい。

　石蘭は李巡査に目禮をしたが、東大佐の姿を認めると、はつとするやうであつた。

　李巡査は東大佐の名刺を石蘭に渡して、

「この方がお父さんに御面會のため態々いらつしゃつたと申上げなさい」

と云ひ渡した。

　石蘭は李巡査に、又東大佐にも一禮した。大佐も輕く手を上げて答禮した。

しばらくすると、に通ずる小さい門が開かれて再び石蘭があらはれたが、石蘭はいつの間にか前掛を取り、新しいとに着換へてゐて、髪にも櫛を入れてあつた。

「どうぞお這入り下さいませ」

　石蘭は東大佐に向つた恭しく禮しつゝ門の傍に立つた。

　東大佐は叮嚀に答禮して、小さい門を潜つた。大佐には、こんな門を潜るのは、生涯始めての事であつた。

　門を這入ると四坪ばかりの庭があつて、それが亂石積の垣で區切られて居り、垣に沿うて花壇が設けられてゐるのが大佐の眼に付いた。菊でも作つてあつたのだらうと大佐はふと思つた。

　大佐が踏み石に足をかけ途端、障子があいて、黒地に白のを付けたを着た、白髪を蓬々と云ひたい程ふさふさと耳のところまで垂れた老人が緣側まではれた。眼と頬は痩せこけてくぼんでゐたが、眼光には炯々たるものがあり、厚過ぎるかと思はれる唇は一文字にきりりつと締まつて居つて、剣道で鍛へたかと思はれるやうな氣品を備へてゐた。

　大佐は先づその老人に擧手の禮をして緣側に腰掛けて靴を脱いで上がつた。石蘭は大佐の軍帽と外套と佩剣を受けて次の間に這入り、老人は朝鮮語で、

「どうぞ」

と大佐に先を勸めた。

　大佐は老人より先に室に這入り、ついで金老人も這入つて障子をしめ、初對面の挨拶を交はした。

「ようこそいらつしゃいました」

　金老人の聲は柔かではあるが力があつた。

　石蘭が、手をついて大佐に日本式のお辭儀をして、父の通譯に當つた。

「伜や娘が大變お世話になりまして、お蔭さまで生命が助かりました譯で、早速御禮に上がらなければならぬのですが、何分事變関係で軍務が急がしくて、誠に失禮を致しました。厚く御禮を申上げます。それに娘の、あの晩の手紙では、一寸した怪我で、二三日友人の所で遊んで來ると書いてありましたので」

と云つて大佐は、オンドルに額を押し付けた。石蘭は大佐の云つた言葉を父に譯して聞かせた。

「いや、御覧の通りの貧乏暮しではありますし、十分御介抱も出來なくて反つて恐縮致します。御令息も御令嬢も、とんだ御災難で、さぞ御心配でいらつしやつたことでせう。お二方とも誠に立派な方で、家の者共も皆感服致して居ります。その後の御容態は如何でありますか」

　大佐は、金老人の云ふことを、直接聞き分けることは出來ないが、その音量と云ひ、重々しく誠實な態度と云ひ、さすがに指導者の貫祿があると思つた。

　大佐は、石蘭が老人の言葉を通譯し終るのを待つて、今度は石蘭の方に向き直り、

「あなたがお嬢さんでしたか。子供達が非常にお世話になつたさうでありがたうございました」

と云つて、首を下げた。

「いゝえ、何も行き届きませんでしたのに、恐れ入ります」

石蘭は叮嚀にお辭儀をした。

「お兄さんは、今いらつしやらないんですか」

「はい、病院に行つて居ります」

「うむ、さう、大學でしたな」

「はい」

「お目にかゝれなくて殘念です。どうぞよろしく」

「はい、畏まりました」

　石蘭は、大佐との對話を父に譯して聞かせた。それを聽き終はつた金老人は、一つ大きく頷づいて、

「公務御多忙のところ、わざわざお越しを賜はつて、恐縮致します。お茶も差し上げられませんし、煙草さへ差上げる程のものもありませんので、誠に申譯ありませぬ」

と云つて靜かに首を下げた。

「いや何う致しまして、結構でございます」

　大佐は老人と石蘭とに首を下げた。

　大佐は上衣のボタンを外して、水引をかけた封筒を取り出し、ボタンをはめ直してから、それを前に出して、

「僅かなでありますが、ほんの御禮のしるしとして、差上げますから、どうぞ御令息方の學用品のお足しにでもお遣ひ下さるよう、願います」

　石蘭が譯するのを聽くと、老人はにこやかな顔になり、兩手で、金の入つてゐる封筒を受取つて

「ありがたうございます。お志は喜んで頂戴致します。併しお金だけはお返し致しますから、どうぞ悪しからず」

と云ひながら、封筒を大佐の前に差し戻した。

　大佐は、しばし眼をつむつて考へ込んでゐたが、やがて顔を上げて、

「それでは私が頂戴致します」

と云つて、上衣の内ポケツトに納めた。

　これで大佐と老人との會見は終つた。

　大佐が別れを告げて立ち上ると、老人は門のところまで、石蘭は庭先まで大佐を見送つた。

　ずつと表庭で待つて居た村の子供達が、又ぞろぞろ大佐のあとについた。大佐には、この子供達が先刻よりは變つたやうな氣がした。大佐の郷里の子供達と大したかはりはないやうな氣がした。

　大佐は街道を歩きながら李巡査と話した。

「金永準さんはそんなに評判が惡いのかね」

　李巡査は何う答へて好いのか解らなくてたぢたぢした。

「金さんは立派な人ぢゃないか」

　大佐は李巡査をかへりみた。

「はい、たゞ不逞鮮人でございまして」

　李巡査はやつと答へた。

「村の者との關係は何うかね？」

「金永準とでございまずか」

「うむ、村の者は金さんを尊敬してゐるぢゃらう」

「はい、困つたもので。全く愚民でございますから」

「さうか、君は金永準はどこが惡いと思つとるのかね」

「はい、人間は申分のない立派な人間ですけれども」

「だゞ不逞鮮人だからいけないと云ふのか」

「左様であります」

　大佐は自動車に乗つて歸途に就いた。車中で大佐は深い思に沈んでゐた。朝鮮人を眞に　天皇の臣民にするには金永準のやうな者の心を獲得しなければならぬ。金永準に忠誠を誓はせることが出來ない程、帝國の朝鮮統治の道義的精紳は弱いものではない筈だ、と大佐は思ひながら、金老人の、あの苦勞の跡の多い、而も信念に生きて來たことをもの語る容貌と心境とを思ひやつた。　（次號へつゞく）　（『緑旗』昭和14年3月号）

（二）

花咲く頃

　四月も末になつたある日であつた。武雄は文江とつれ立つて佛光里の金永準の家を訪れた。二人が金家で世話になつてから二ケ月目であり、その後三度目の訪問である。

　京城の四月と云へば正に花頃で、いはゆる柳緑花紅の時節だ。昌慶苑の夜櫻が開かれるのも大抵この四月の下旬である。

　貧しい佛光里とはいふものゝ、茅屋のあひまあひまには、黄金色の朝鮮連翹位は見られるし、村の後の山の岩蔭には山躑躅も咲いてゐる。少し古い大きな農家だつたら杏や桃や梨の一本や二本は裏庭に植ゑるものである。

　佛光里にも春は來て居つた。村の畑は鋤きかへされて、犬や鶏や子供達のはいれないやうに黍殼を編んだもので三尺位の高さの圍がしてあるし、ことに眼につくのは、屋根が藁で綺麗に葺きかへられたことであつた。眞夏も過ぎてあの屋根の黄金色が、し銀の色に變る頃には、そこにかぼちややパカチの蔓が、風韻のある線を描いてからまるであらうし、そして十月の霜降る頃になつたらの唐辛が、これらの屋根の上に乾されて、生き生きした風趣を添へることであらう。

「お兄さま。あたし佛光里へ來て、朝鮮の屋根がとても好きになつたわ」

　文江は泥柳の赤味を帯びた若葉を一つ採つて口に啣へた。

「朝鮮屋根の何處が好いと言ふのか」

　武雄は村を眺めながら言つた。

「さあ、一寸云へないわ。お兄さまはどう？」

「うむ、見慣れると矢張り好いところがあるね。朝鮮の瓦葺の屋根の線は素的だね、尤も、上から見た方が一番好いがね」

「瓦葺の屋根も好いけれども、あたしあの藁葺が大好き。ほら、兄さま」

　文江は武雄の袖を引く。

　武雄は立止まつて振りかへる。

　文江は村を指しながら、

「あの藁葺ね」

「うむ」

「あの屋根の輪廓ね、かういふ風に」

文江は兩手で、虛空にいくつかの弧を描いて見せて、

「あの輪廓がね、兄さま。水平でもないし、また水平でなくもないし、楕圓形のやうで拠物線のやうで、それでゐて、ちやんと一つの統一と安定をもつてるんぢやありません？　あそこがとても、好き」

「あ、さうか。文江、大分難かしいこといつてるぢゃないか。大したもんだ」

　武雄はくすくす笑つた。

「お兄さま、からかつていらつしゃるの。わたし眞面目だわ」

文江は口惜しさうに武雄を睨む。

「からかつてるんぢやない、感服してるんだよ。本當に言はれて見ればさうだね。あの間が抜けてるやうで、それでゐて要領は得てゐるといふところだらう？」

「さうよ、お兄さまやつぱり話せるのね」

「話せるとは恐れ人つたな」

「ごめんなさい」

「いや、さうあやまらなくても好いが、僕のも一寸聞き囓りだよ」

「聞き囓りつて？」

「淺川伯教と言ふ朝鮮美術の權威者があるんだ」

「その先生が、その淺川先生が、あたしの言つたやうなことをおつしゃつた？」

　二人は歩き出した。

「うむ、丁度文江の言つたやうなことを言つてた、もつとも陶磁器に關してだがね」

「なんとおつしゃつたの？」

「なんでもそんなやうなことだつたよ。朝鮮の陶磁器の形のことを言つてね。その安定がないやうで安定があり、間が抜けてゐるやうでまとまりがあるとかなんとか、まあそんなことだつたよ」

「それだけなの？」

「あゝさうそう、シンメトリーを無視したやうで一種複雜なシンメトリーが合まれてるゐとか言つてたよ」

「それから」

「それから、えーと、それを土臺にしてだね。朝鮮の民族性がどうのかうのつて言つてたよ」

「朝鮮の人の民族性もさうだつて？」

「うむ、よくは覺えてゐないがね。なんでも、こんなこと言つて居られた。美術はやつぱり民族性をあらはすとか」

「あたりまへだわ。今頃感心なさるの？　法律家は鈍いわね」

「朝鮮の人の性格も一見まとまりがないやうで、やつぱり一種のまとまりがあるんだつてね。われわれ日本人は、水平なら水平、圓なら圓と、きちんとしたところが好きで、不得要領と言ふところが大嫌ひだと言ふんだ。ところが朝鮮の陶器から判断すればだね、その不得要領のところが特色だと言ふんだ」

「それで両方の性格がぴつたり來ないとでも言ふ譯ですの？」

「いや、そんなことなんか言はなかつたがね。つまり何んだよ、淺川さんの言はれるところではだね、朝鮮人の性格には、我々日本人の性格よりは、もつとぬうぼう的なところがあると言ふらしいんだ。もつとも比較的のことだがね」

　こんなことを言つてゐる中に二人は金家の前まで來たのであつた。

　もう案内をも乞はずに、文江は中庭に入るやうになつてゐた。

「まあ！」

と石蘭は緣側から庭へ飛び下りて文江の手を握り嬉しさと驚きとを一時に爆發させて白い齒を見せる程であつた。石蘭が驚いたのは、文江が朝鮮服を着てゐたことである。

「わたしの朝鮮服の姿、似合つて？」

　文江は、手で袖や袴の裾など上げて見せた。

「とてもよく似合ふわ、洋服姿よりももつと引き立つと思ふわ。もつとも、あなたはどんなものをお召しになつても」

「あら、石蘭さん。お世辭がお上手になつたのね。お母さまは」

「一寸、外出」

「お父さまは？」

「をります」

「ちつとも外出なさらないのね、お父さまは」

「え、ちつとも。さあ、お上りなさいな。母も兄もすぐ歸ると思ふわ、お隣の結婚式に行きましたの。今日はお一人？」

「兄と」

「まあ、お兄さまを表にお待たせして置いて？」

「どうせ兄はには入れないんでせう」

文江は一寸拗ねるやうに笑ふ。

「さうね」

　石蘭は、右手の指先を噛む。

　文江は石蘭の顔から、その心を讀み取らうとするかのやうに、笑を含んだ眼でじろじろ見てゐる。それは石蘭の武雄に對する心持を探りたかつたからだ。

「ぢや、してお父さまのへ押し掛けませうよ。いけません？」

「いけないことないわ、ぢやいらつしやい」

　石蘭は先に立つて中庭から舍廊へ通ずる門の方に歩き出した。

「わたしも？　わたしも此方から舍廊に入つて好いの？」

「好いわ、どうして？」

「でも、失禮にならないかしら」

「もともと女は表門から舍廊に入るといふことはないわ」

「さう？」

石蘭と文江が舍廊に入つた時には永準は古風の、球の大きい眼鏡を掛けて書見をして居つた。

　石蘭は一足先に入つて、

「お父さま、東さんがいらつしゃいました」

と呼びかけた。

「先生、しばらくでございます」

　文江は叮嚀に、永準にお辭儀をした。

　永準は急いで眼鏡を取つて座を立つて答禮した。婦人に對する禮なのである。

「おう、朝鮮服を召していらつしゃるな」

と永準は眼を大きく見開いて、石蘭と並んで立つてゐる文江を、にこやかに眺めた。文江は、朝鮮式の禮儀に叶ふやうにと永準に禮をすると直ぐ立ち上つて、數歩傍へ下つて、部屋の隅の方に、石蘭の傍に両手を袴の前に重ねて、立つてゐたのである。

　石蘭は、文江の挨拶の濟むのを待つて、急いで、表庭から舍廓に通ずる門を開けに行つた。石蘭は胸のどきどきするのを感じた。

　どうしたことだらう。武雄のことを思ふと胸が騒ぎ、武雄の前にゐると顔がる、と石蘭は自分で自分をたしなめながらも、どうすることも出來なかつた。どうせ叶はぬことだといふことを石蘭が諦めれば諦める程、諦められなかつた。

　石蘭は胸も騒がせまい、顔も熱らせまいと自分で自分を押へながら閂を開けた。石蘭の前には、黒と白とを混ぜたやうな如何にも落着いたスコッチの背廣に、同じ柄のオーバーを着て、焦げ茶色のソフトを手にした武雄の姿があらはれた。

武雄は父大佐に似て小柄ではあるが、父の精悍さの代りに如何にも理想家タイプの理知的で精神的なところがあつた。

「いらつしゃいまし」

　石蘭は、やつと聲を絞り出してこれだけは言つたが、「お入りなさい」さへ續かなかつた。石蘭は自分ながら、今日はどうかしてゐると思ふ程興奮してゐた。

「やあ、今日は。皆さん、御達者ですか」

「は、ありがたうございます」

「忠植君は御留守ですか」

「は、いゝえ、一寸隣へ行つて居ります」

武雄が脱いで緣側に置いたオーバーを石蘭は、どうしょうかと一寸ためらつたが、思ひ切つて、右腕に掛けて次の間に入つた。

「先生しばらくでございます」

　武雄は永準に禮した。

「よう、ようこそ。御尊父は御健康ですか」

永準はなれなれしく訊くのであつた。

「はい、相變らず」

「こんな邊鄙なところへ、度々御來訪下すつて誠に忝ないことぢや。まあお樂になされ」

と永準は武雄にくづすことを勸め、次ぎに文江に向つて言つた。

「あなたもお坐りなされ。何故立つてゐらつしやる」

「あ、あれですか、先生」

と武雄は文江を顧みて、

　「妹は今日は朝鮮服を着て居りますので、朝鮮風の禮儀を守つてるのですよ」

と云つて笑つた。

　「あ、左様か、はゝゝゝ」

と永準は打解けた笑ひ方であつた。

　「左様々々。ローマに入ればローマにといふ譯か。立派なお心掛けぢや。まあお坐りなされ。朝鮮でも眼上の人が坐れと云へば坐るのですぞ、はゝゝゝ」

　武雄は、今日はこの老人、大層機嫌が好いと思つた。この分なら忠植と石蘭を招待することが許されさうだと思つた。二度會ひ三度會ひしてゐる中に、この老人の、心を閉ざした氷も融け始めて、春の小川が音を立てゝ流れ始めたんだらうと思ふと、武雄は嬉しかつた。それだけでも自分たちの誠は通じたものと思はれた。

　文江は心持ちはにかみながら坐つた。石蘭も文江の傍に坐つた。

「如何ですか、先生、妹が、あゝいふ風に朝鮮服を着けたら」

　武雄はもつともつと永準の心の底に入つて見たかつた。

「うむ、よう似合ひます」

　永準も感心したやうに着こなしをあらためるやうな眼付きで文江を眺めた。そして滿足した風であつた。

　それを見ると武雄も文江も嬉しかつた。石蘭も嬉しかつた。

「先生、あゝして、同じやうな着物を着て、お嬢さんと並んでゐると、何も變るところはありませんでせう？」

　武雄は、永準に念を押した。

「うむ、唯御妹さんの方がもつと上品ぢゃな、はゝゝゝゝ」

　永準はこんな御世辭までも言ふのであつた。

「あら、先生」

　文江は首を下げた。

「いゝや、上品のどうのつていふ問題ぢやありませんよ。朝鮮人も日本人も、結局違ふところはないのではないかといふことなんです」

　武雄は愈〃急所に觸れたのである。

　武雄の言葉を、石蘭が通譯するのを聽いてゐながら、永準の顔の表情は、見る見る變つて、武雄が始めて、永準と對面した時のやうな嚴肅さに歸つて行つた。

石蘭の通譯を聽きをはると、永準はぢいつと眼を閉ぢて、深い思ひに沈んで行くやうであつた。

　武雄をはじめ文江も石蘭も、嚴肅な顔になつて了つた。靜寂の中には尋常ならぬ空氣が漂つてゐた。

　永準の方から云へば、武雄の問は尋常一様なる問ではない。それは永準が一生涯守つて來た根本思想に對する挑戰である。決して、単なる御世辭として、またはその場限りのつきあひとして、無責任な答をなすべきではない。永準は誠の人である。

　永準が今まで、東一家の人々とつきあふ時には、單なる人道的立場からであつた。人間と人間との情と義とを盡したのであつた、民族問題とか、さういふものを一切考慮に入れてゐなかつた。よく世間では、金永準と云へば排日家の親玉と言つてゐるが、金永準は日本のことであれば何んでも扱き下し[[2]](#footnote-2)、日本人であれば誰でも懀むといつたやうなそんな排日家ではない。彼は日本の歴史にも通じてゐた。ことに明治維新史については一家見を立てゝゐる位研究が深かつたし、従つて日本の美點も、短所もよくのみ込んでゐる。朝鮮人の中で神皇正統記や山陽外史や古事記、日本書紀を讀破したものは彼以外に、さう多くはあるまい。

　支那事變勃發するや、彼の古い同志の多くは、どつちといへば、むしろ蒋介石贔屓であつたが、金永準は、敢然正義は日本にあると言ひ放つた。彼の論據はかうなのである。天は最も正しきものに權を與へたまふ。アジア諸民族の中で、少くも現在に於いては、日本が最も道に叶ふ生活をしてゐる國民である。であるから、アジア諸民族の中から、領導權をもたせるべきものを選ぶとしたら、公平に見れば、日本民族ををいて、他にあるまい。またさうすることが領導される諸民族の利益でもある、といふのであつた。

　金永準の、かゝる主張は、一部の人々の間に物議を醸したらうことは勿論である。或る人は金永準が、出獄してから變節したのだとさへ嘲笑した位である。

　併し金永準は、人が何んと言はうと、それに構つて言を左右にするやうな人物ではない。彼は一旦正しいと定めると、それを信念にしてしまつて、天下が寄つてたかつてだまさうとしても、いつかな一歩をも讓らぬのである。

　だから、彼は日本の正しさも強さも能く知り抜いてゐる。また、朝鮮も結局日本の領土として朝鮮人は日本臣民として生きて行く運命にあることも能く知つてゐる。しからば彼は何故排日家と呼ばれ、不逞鮮人と睨まれてゐるのか。それは他ではない。第一は民族的獨立に對する義理であつて、第二は、朝鮮人が永久に植民地の土着民として、賤しまれなければならないといふことに對する悲憤である。この二つの點が釋然としないために、金永準は日本の朝鮮統治に絶對反對といふ立場を死守して來たのであり、警察に於いても、また、檢事廷、豫審廷、公判廷に於いても、彼は、堂々と自説を主張して一歩も退かない。これが金永準の日本に對する態度であつた。

　彼のこの態度は、今も尚變つてはゐない。南總督の内鮮一體論も、金永準の心を動かすには至らなかつた。それは政治家の一辭令に過ぎないと思つたのだらう。

「まづ平等にすることだ。まづ兩民族を平等の地位に置いてから、足りないところを補ふのだ。まづ足りない一方を足りるやうにしてから平等にするとすれば、さういふ日は永遠に來ない。何んとなれば足りない方が國民的感激をもたぬからである」

　彼は或る時こんなことを言つたことがある。

「平等にさへして呉れゝば、君は滿足する積りか。獨立主義を棄てる積りか」

と、金永準の古い同士はつた。

「うむ、君や俺はどうあらうが、朝鮮民衆は滿足することであらう」

　金永準はかう言ひ切つて、その人と別れたのであつた。

　武雄は、二月のあの負傷事件以來、數回、忠植とあつて、胸襟を開いて、ざつくばらんに、民族問題など論じあつたし、忠植を通じて、その父たる金永準の思想も略々知つてゐた。忠植は、その父の意見の側に立つとは言つてゐても、若いだけに、多少動揺の見込みがあるものゝやうに、武雄には見られた。

　かういふ譯であるから、石蘭と文江と何も變ることはないぢやないかと突き込まれては、金永準が深い物思ひに沈むのも道理だと、武雄は思つた。

　金永準はぢいつと瞑想を凝らすことしばし、つひに眼をぱつと開けた。

「ありがたう」

といとも慇懃に、武雄に向つて首を下げた。

　武雄は、これは何を意味するのかと、一寸面喰つた形であつた。

「ありがたう、あなた方の御心持は、よく理解出來ます。御妹さんが本日朝鮮服を着用されたお心持も、私にはよう理解出來ます。そのお心持に對しては幾重にも感謝しなければなりませぬ。本當を言へば、この私もさういふ氣持ちになりたいのです。併し不幸にも私はまだそこまで達してゐませぬ。但し個人的には別です。例へばあなた方御二方に對しては、私は非常に親しい感情を持つとる。誠に御二方共御立派な人格と人情を持つて居られて、しかもこの私に對しては分に餘る程の御好意を持つて居られる、私はそれをしみじみ感じます。そして感謝して居る。失禮ながら私はあなた方御兄弟に對しては、他人のやうな氣がしないのです。さうです、あゝいふ風に、御妹さんが娘と並んでゐらつしゃるのを拜見すると、わが子のやうに可愛いのです。これが失禮な申分だつたら御恕し下さい」

　武雄は、金永準が、重々しい、誠心籠つた調子で、その場合々々武雄に首を下げながら話してゐるのをぢつと見てゐると、言葉は解らないが、その意味は解つたやうな氣がした。

　石蘭も父の言つたことの重大さを思つて、一語一句も落すまじと、に、二人に通譯して聞かせた。武雄や文江は石蘭の通譯を聽きながら、それらの言葉を、先刻の金永準の表情や身振などと思ひ合はせて、句切り句切り毎に金永準に對して頭を下げて感謝の意を表した。

　最後に、武雄や文江が、我が子のやうに可愛いと思つてるが、それが失禮に當つたら恕して呉れといふ段になると、武雄と文江とは言ひ合はせたやうに、殆んど同時に、

「いゝえ、どう致しまして、誠にありがたうございます」

といつた。

　つひ今しがたの、緊張した空氣は、春の日にふさはしい和やかさに代つた。しかし、武雄は、今尚融け切らぬ、山蔭の氷を思つて胸を押しつけられるやうな、重い苦痛を感じた。

忠植と、その弟の義植とが、婦つて來た。

「やあ、東君、おう、お嬢さん」

　こんな挨拶がかはされた。

　武雄は、忠植に、

「今君の御父さまと大事なお話をしてたんだがね、僕達、君も僕もだよ、それから、お妹さんも文江も皆んなが、實に重大な責任が負はされてゐることを感じるんだ。僕達はもつと一つにならなくちやならないんだよ。それは日本帝國のためにもさうであるが、朝鮮のためにも、はた東洋全體のためにもさうなんだ。僕達が惡かつた。僕達日本人全體が惡かつたんだ。あやまる、平にあやまるよ。僕達日本人は、朝鮮同胞に對する愛と敬とが足りなかつたんだ。　陛下の大御心が解らなかつたんだね。僕は自白するよ。しかし日本人は、性根が悪いんぢやないぜ。心は至つて單純で感激し易い國民なんだ。たゞ今まで朝鮮に對する理解が足りなかつたんだね。家の親爺の朝鮮觀なんかてんでなつてゐない。それは今日君のお父さんの御言葉を聽いて、尚よく解つた。併し心配することはない。病源が解つたからにはなほせば好いんだ」

　武雄は一旦言葉を切つて、一寸考へるやうな風をしたが、

　「おい金君！」

と忠植の顔をまともに凝視した。

　歸つて來たばかりの忠植には、武雄の言つてゐることの意味がはつきりはしないが、その精神と好意は汲めた。

　「おい金君、僕達は、本當に一つにならう。七千萬と二千萬と本當に一つにならう。今までの間違は皆僕達で匡さうぢやないか。そして、もつともつと住みよい新しい高い文化を産み出すことの出來る日本を造り上げようではないか。南さんの言はれる内鮮一體といふのもそのことぢやないかと思ふ。しかしだね。要は吾々若い者たちにあるんではないか。君どう思ふ？」

「さうなれば誠に結構さ。ところが朝鮮青年は――少なくも力強い或一部はだね、まだそれを信じてゐないのだ。つまり内鮮一體を文字通りに取つてゐないのだよ」

　忠植はかう答へた。

「さうか、まだそれを信じてゐないものがあるのか」

「第一僕からしてまだ、それがはつきりと來ないんだね。東君。日本人が皆君やお妹さんのやうな人であつたらね。實は僕は君に會つてから、國家に對する考が變つて來たやうな氣がしてならぬ。おかしなことを訊くやうだがね、君やお妹さんのやうな方が、日本には澤山あるのか」

　忠植の顔は悲痛な程、またおかしい程眞面目であつた。

「それは澤山あると思ふ。朝鮮を理解している者のことだらう、君の知らうとするのは」

「理解よりも愛だね。眞に同胞と思ふことだね。悪魔の理解といふこともあるからね」

「さうだ、愛だよ。情だね。僕は日本人の純情を信ずるんだ。依怙贔屓といふものかも知れないがね。しかし日本人は純情的ではあると思ふんだ。日本人にも色々な短所も多いがだね、しかし純情的、感激的である點だけは買つてやつて好いと思ふんだ。君はどう思ふ？」

「僕が知つてゐるのは學校の先生方を除いては君位なもんだよ」

「さうだらうね、實はかういふ僕もね、朝鮮の人の先生に習つたこともないんだから、朝鮮の人で知つてゐるのは君の家ばかりなんだ。しかし、僕はこれで澤山だと思ふんだ。大海の水も一滴嘗めれば味は解るんだ。それは、幾千萬の民衆の中には、隨分惡い人間もゐるだらうが、それはお互さまさ。僕は君一人知つて、もう朝鮮は知つた積りでゐる。君も僕を知ることによつて日本を知つて呉れたまへ。もつとも、かう言へば己惚れてゐるやうで濟まないがね」

「いや、君は一寸も己惚れてなんかゐないよ。僕は心から君を信じ且つ尊敬してゐる」

「ありがたう、僕を信じてくれるか」

　武雄は忠植の兩手を取つた。

「うむ、僕自身を信じてるよりも信じてゐる」

「ありがたう。お嬢さんは如何ですか」

武雄は忠植の手を放してゐずまひを直しながら石蘭を見た。

「何をでございます？」

石蘭ははぢらつた。しかし今までの二人の問答は全部注意深く聽いて心に止めてゐた。

「いや、私達を、僕や文江を本當に信じてゐて下さるかといふことですよ」

「固くお信じ申して居ります」

石蘭は、平素の内氣さに似ず、きつぱりと言ひ切つた。

「ありがたう、それで結構です。文江、お前も同感だね？」

「はい、文江も固くお信じ申して居ります」

文江は石蘭の言葉をそのまゝ引用することによつて、ちよつと言ひにくい三人稱の目的格を省く事が出來たのであつた。

金永準は若者同志の會話を聽きながら何かを思想してゐる風であつたが、彼等の話が途切れると眼を開けた。

忠植は、父に今までの會話のあらましを報告した。金永準は一々頷きながら忠植の報告を聽いてゐた。忠植の報告が終ると、金永準は二三度續けさまに頷いてから、石蘭に向ひ、

「お晝の仕度をしないか」

と命じた。

石蘭は忠植や武雄を見た。

「父が君達にお晝の御馳走をしろと言ふんだ。食べて行つてくれないか」

忠植は武雄に、さう言つてから、今度は文江に、

「お嬢さん、好いでせう。また例の朝鮮味噌のチゲといふやつでせうけれども」

と言つて笑つた。

「いや、實はね」

と武雄は開き直つた。

　「今日は君とお妹さんをお呼びしに來たんだよ。母が是非にと言ふんだ。今日は僕の家で遊んで、昌座苑の夜櫻を見てそれから僕の家で一泊するといふプロなんだよ。それで君のお父さんの御機嫌を探らうとしたのが、とうとう大變な問題になつたんだ。もつともそれは御目出度いことにや違ひないから。も一つ、僕達の兄弟の契を結ぶ御祝を兼ねることにしてこれから僕の家へ行かうよ」

　武雄がかう云ふと、文江が、

　「父からも母からも、今日は是非お越しをお願ひするやうにとのことでございましたの。あらもう十一時よ。でも一時間もすれば行かれるから今日は是非、どうぞ。石蘭さんもね。こないだお約束したでせう、この次にはいらつしゃるつて」

と誠心こめて勸めた。

　武雄や文江は、ずつと前から忠植と石蘭を家に呼ぶつもりであつたが、金永準の許しも許しだが、第一母があまり好い顔をしなかつた。母は忠植兄妹の恩誼を感じない譯ではなかつたが、それは何か他の方法で報いるべきで、忠植とやらの兄妹を家庭に呼び入れることは、何んだか、といふうやうに思ふのであつた。

　「お互に交際を始めるにはね、いろいろ考へなければならないこともあるものです」

と母の菊子は言つてゐた。

　それにもう一つ、武雄の母には心配の種になるものがあつた。それは武雄や文江が、忠植とやらの兄妹を、あまりと思はれる程讃めそやすことであつた。しげしげ出入りして居る中に、若い者同志のことだからもしかして思慮のない結果にでもならうものなら家門の恥になるといふことだ。思慮のない結果といふのは武雄と石蘭との間に戀愛のやうな關係でも生じたらといふことである。

　武雄の母菊子に、一層この疑の根據を與へたのは、縁談が纏まりかけてゐた川島美智子に對する武雄の態度の變つたことであつた。

「何も美智子さんがどぅのかうのといふ譯ぢやありませんよ。どうせ近い中に僕は兵隊に行かなければならないんですから結婚はしたくないといふことだけです」

と武雄が美智子との結婚をきつぱりと斷る時には、菊子ははつとせざるを得なかつた。もつとも、今までだつて武雄が美智子と戀仲といふ程ではなかつたのだが、それでも一緒にハイキングに行つたりして好きであつたことは爭はれない。のみならず、川島家では結婚を前提として、美智子に武雄との交際を續けさせてゐたことを、武雄は百も承知の筈である。然るに武雄は、美智子に對して、きつぱり拒絶する言明をしたのだ。母の菊子が驚くのも無理はない。

　「あなたは東家の一粒種ですよ。あととりですよ」

と菊子はきつとなつて、武雄を睨んだのであつた。

「出征するかも知れないからこそ、尚結婚を急がなければならぬのです。それにあなたの結婚が遲れゝば、文江の結婚も遲れるのです。岩谷さんの方でも、文江と克己さんとの結婚を急いでいらつしやるのです。お父さまも岩谷さんもいつ出征されるか解らない軍人でいらつしやいます。だから兩方ともお父さまの出征前に式を擧げようと言ふのです。それをあなたが、我を張るために、皆様に御心配をお掛け申してゐるのです。武雄、一體どういふ了見で、結婚しないなんて、そんな無茶なことを言ふのですか」

　菊子はいとも嚴重な調子で、武雄と文江を前に、きびきび意見をするのであつた。

　「お母さん、僕結婚しなくつたつて文江が結婚出來ないといふことはありませんよ。そんなこと皆舊式ですよ。文江さへ岩谷君のところへ行きたかつたら何時式を擧げても好いぢやありませんか」

　「武雄、そんな無茶を言ふものぢやありません。それにあなたに、何か間違でも起つて御覧なさい。それは東家に泥を塗ることですよ」

　菊子は最後に、かう言ひ渡したのであつた。これは無論石蘭との開係を指したことであつて、武雄もよくそれを知つてゐた。

　かういふ譯で、忠植や石蘭を家に呼ぶことを母に言ひ出せないのであつた。

　ところが、或る日、ふとしたことから文江が武雄の日記帳を見た。それとなく頁を繰つてゐると隨分石蘭のことが書いてあつた。佛光里で石蘭に介抱されたことや、その後佛光里へ訪ねて行くたびに、石蘭と會つて話したことなど、こまかに書いてあつた。元來武雄は、専門も法律であるが、文學など餘り好きな方ではなく、政治と修養にばかり頭をつかつてゐるであることを、よく知つてゐる文江には、これが決してたゞ事のやうには受け取れなかつた。もつとも武雄の親讓りの性格として、石蘭が戀しいとか、忘れられないとか、そんな戀愛文學的の文句は、彼の日記には一言も見出されなかつたが、それだけ、反つて武雄の胸が、文江には思ひやられたのであつた。

　それで或る日のこと、

「お兄さま、御免なさいね」

と武雄の書斎に入りざま文江が言つた。

「何んだい。御免なさいなんて、お小遺か？」

「あら違ふわ。文江、お兄さまの日記見ちやつたの」・

　武雄も流石にさつと狼狽の色を現はした。

「悪いと思ふわ。でも文江、お兄さまを思ふからよ。何んでもお力になつて上げようと思つだの。だから悪く思はないでね、お兄さま」

　文江はにつこり笑つて見せた。

「悪くなんか思つてゐないが」

「文江がお行儀が惡いとおつしやるんでせう」

　文江は聲を出して笑つた。

「お前の日記も見せろ」

「プラス、マイナスにしようつてんでせう。その手には乗らないわ」

「見なくつても、兄さんはちやんと知つてるよ」

　武雄は、ばつの悪さうな笑ひを洩らした。

「あら、何も文江には秘密なんかないわ」

「そんなら何故、お前は日記帳をいつも、どつかへ隱して置くんだい？」

　「まあ、お兄さま。お探しになつたことがあるの？　文江の日記」

　「うむ」

　「何故」

　「何んだか、文ちゃんの日記が讀んで見たくなつたからさ、どんなことを考へてゐるか。兄妹でもね、大きくなると、お前の心の奥までは、兄さんでも窺くことは出來ないな」

　文江もからかひ氣分か消えて、しんみりとなつてしまつた。そして、兄の心の奥を見透さうとでもするやうに、いつまでもじろじろと武雄の顔をじいつと見つめた。文江には兄が今まで見たことのない人のやうにも思はれた。同じ家で、赤坊の時から一緒に育ちながら、いつの間に、お互にかう心と心とが通じない、別人になつてしまつたんだらうと不思議に思はれた。

　「お兄さま」

　「なんだい？」

　武雄は何かの思ひから心を轉ずるやうな態勢であつた。

「文江は、いつまでもいつまでもお兄さまに心の秘密なんか持たない積りよ。お兄さまにだけは文江は一生涯駄々つ子時代の妹でゐたいの」

　文江の眼には露が光つた。

「ありがたう、文江、さうあつて呉れ。兄さんもね、この頃何んだか、餘程氣持が變はつて來たやうだね」

「どういふ風に？　話して」

「さあ、何んと言つたものかね。價値の轉換とでも言ふのかね」

「難かしくなつたわね」

「いや、何もさういふこつちやないんだ。僕はいつたい情といふものを蔑んで居たんだ。理性主義だつたんだ。何んでも世の中は理窟で行くものとばかり思つてゐたんだよ。ところがどうもさうでないらしいんだ。やつぱり本當に人間を動かすものは情だと思ふやうになつたよ。心理學でいふ、そんな感情でなくて、まあ、普通人情といふ奴だな、この人情といふ奴こそ、人生の支配者のやうに思はれるんだ、例へば愛國心もだね、それは結局情だよ。僕達が日本を愛する。　陛下のために生命を棄てる。これは皆理性ではないんだ、情だね。親子だつて、兄弟だつて情で結ばれてゐるんぢやないか。それだからつて理性を否認する譯ぢやないがね。理性――つまり理論が情化して始めてになると思ふんだ。まだ情にならない理論は要するに空論だな。科學的理論は別としてだ。内鮮一體もさうだと思ふよ。内地人と朝鮮人と情で結ばれるんでないと本當ぢやないと思ふね。兄さんは法律も人情を基調に解釋して見たいと思つてるんだ。人間萬事人情離れては實在しないんだと思ふ。暇さへあれば論文を書いて見ようかと思つてるよ」

「まあ、そんなのなら、あたしもお兄さまの説に大賛成」

「文ちゃんも共鳴するか」

「共鳴のなんのつて。お兄さまこそ文江に共鳴して來た譯ぢやないの？」

「さうだつたな。お前は文學家だからね」

「文學家だなんて、からかつちゃいやよ。人情主義者よ」

「人情主義者、人情主義者。うむ、うまいこと言つたね。やつぱり文ちゃんは頭が好いな」

　武雄が愉快に笑ふと、文江は單刀直入、

「お兄さま、石蘭さん今でもお好きでせう？」

と突き込んだのだつた。

「うむ好きだよ」

と武雄に素直にいつた。

「只、好きといふだけ？　それ以上ぢやないの」

「うむ、それ以上のやうでもある」

「でもある、なんておつしやらないで、はつきりおつしやいよ」

「それ以上の言葉は一寸使へないぢやないか」

　文江は兄の言つたことを噛み味はふといふ風にしばらく默つてゐたが、

「解つたわ。お兄さまの御氣持ち尊敬するわ。普通の人なら、愛してるといふところでせう？」

　文江は駄目を押した。

　武雄はきつい眼付になつたが何も言はなかつた。

　それから文江は母を説いた、さうしてとうとう忠植と石蘭とを招待することになつて、今日二人をさそひに來たのである。

　一同が金永準の答を待つてゐると、彼は、意外にも、

「うむ、行つて好い」

といふ許可を與へて呉れた。

「それでは御好意にあまへて御厄介になるとしよう」

　忠植は父の言葉を通譯する代りに、武雄に、かう言つた。

「ありがたうございます」

　武雄と文江は同時に、金水準に禮を言つた。

「では急がう」

　四人の若者たちは、金永準の書齊から出た。

　春の日差しは明るくて暖かつた。雄鶏が黄金色の屋根に乗つて聲高らかに晝を告げてゐた。

武雄と忠植と、文江と石蘭と四人で、道幅通りに一列になつたり二列になつたりしながら樂しさうに、義州街道目ざして畦道を歩いて行く後姿を、金永準は緣側に立つて飽かず見送つてゐた。（次號へ續く）（『緑旗』昭和14年4月号）

（三）

一つの道

四人は小徑から義州街道に入るところ近くまで來た。渓川に沿うて小林寺や洗劍亭のある谷を通つて彰義門に通ずる道が岐れるところだ。道といつたところで、ほんのあるかなしかの樵徑で、頂上に出るまでには十四五町も渓谷を遡らねばならない。有名でもないけれども京城附近では一寸景色の好い渓谷の一つだ。

「こゝを歩いて行かうか」

　武雄は川べりに立ち止まつて、三人を顧みた。若しこのコースを取らなければ碌磻里でバスに乗らなければならない。

「それが好いわ。でも石蘭さんはどう、くたびれない？」

　文江は石蘭の顔を窺いた。

「くたびれなんかしないわ。あたしどつちでも好いのよ」

　石蘭は文江に微笑んで見せた。彼の女も内心山の中を歩いて見たかつた。

「ぢやあるかうよ。どうもバスに乗ると、自分が荷物になつたやうでね、何んだか情けなくなるよ」

　武雄は渓川に沿うて歩き出した。三人も後についた。

　瓶の口のやうなところを通り抜けると、もう深山の相が眼前に展開した。觀音峰の岩肌が左に見えて、磐石の上を水が昔を立てゝ流れてゐた。

つゝじが火のやうに暁いてゐる。

「あら、つゝじ」

と、文江が子供のやうに喜んだ。

　「實際朝鮮の山つゝじは好いな」

　武雄も黒い岩肌に、小松の青みとつゝじの赤みとが點綴されてゐるところをじつと見凝めてゐた。ハイカーの武雄に取つては敢えて珍しいことでもないが、今年の山つゝじを見るのはこれが始めてゞあつた。しかも今日は特に気が浮き浮きしてゐてすべてが珍らしく、嬉しかつた。

　四人は進んで行く。渓川は如何にも人跡の到らない清らかさを保つてゐた。あまり人の來ない淋しいところであるからだらう。

　春の日だ。晴れてゐるといつても、薄靄がかゝつてゐるやうな、ねむたさうな晴れ方である。綠や、藍色をした小さい蝶々などが逐ひつ逐はれつ一行の前を飛んで通つたりした。ちつとも人間を恐れるといふ風が見えなかつた。

　道は段々曲りくねつて、狭い峡谷へと入つて行く。如何にも稚拙な彩りと形とをもつてつゝじは何處にも咲いてゐた。日當りの好いところには、もう色が褪せて散りかゝつてゐるのもあるが、岩蔭などにはまだ眞赤な蕾をもつたものさへあつた。

　石蘭は妙に胸が騒ぐのを覺えた。武雄の後姿が不思議な力で、心に烙け付くやうでどうすることも出來なかつた。顔がほてり汗が滲み出るやうで、何度も何度も文江の眼に付かないやうに、ハンカチで額や鼻先をそつと押へた。

「そんなことないわ。あたしが東さんを好きだなんて、そんなことないわ」

石蘭は自分で辧解して見た。しかしそれは何等の効果をも齎らさなかつた。さういふ風に自分の心を押へれば押へる程一層恥かしさに似た、もどかしさに似た一種の苦痛を感ずるだけであつた。

「全く貴女様のおやさしい御介抱のたまものと存じ厚く厚く御禮申上げます」

といふ武雄からの禮狀の文句を、石蘭はまた思ひ出して見た。それはいつ考へて見たつて同じ文句で、ありふれた御禮の言葉でしかないのだが、それでもこの言葉が呪言のやうに魂に喰ひ込んで離れない。そればかりでなく、この言葉が月日が經つに從つて、ますます光を放ち聲をさへ出すやうに思はれて來るのであつた。

「こんな気持になるのは何かの因緣かも知れないわ。いや、だけどそんなことをかしい。東さんとあたしと何の因緣もありやうがないもの」

　石蘭はかう自ら肯定したり、否定したりして來たのであつた。

　それが今日のやうに、武雄と同じ山道を歩いてゐると、尚更その因緣感が強くなつて來て、ステツキを振り振り、兄と並んで歩いてゐる武雄の姿が、犇々と魂に沁み込んで來るのであつた。

　石蘭はせつない自分の感情をまぎらさうとでもするのだらう、手を延ばして、つゝじの花を一つ取つて、蕊を拂つてしまつて、口の中に入れて囓つた。淡い甘味が味はゝれた。

「その花喰べられるの？」

　文江もつゝじを一つ取つた。

「え、子供達、よくつゝじの花を食べるのよ。あたしも小さい時によく食べたわ」

　石蘭はきまり惡るさうに微笑んだ。

「毒ぢゃない？」

と言つて文江も石蘭を真似て花をとつた。

「毒なのは岩躑躅なの。これよりももつと赤くてねばねばしてゐるわ。あれは未だ咲かないの」

「おいしいわね」

　文江もとつて口に入れた。

「おいしいといふこともないけれども、花を食べると子供みたいな氣がして嬉しいわ」

「内地でも櫻の花は鹽漬けにしてお茶に浮かして頂いたりするのよ」

「朝鮮では、花を食べるといへば春はつゝじに秋は菊ね」

「菊の花も食べる？」

文江は眼を睜つた。

「え、菊の花はとてもおいしいのよ。もつともあれはを食べるやうなものだけれど」

「まあ！　薫を食べるなんていゝわね、そんなら、つゝじは色を食べるのね」

　文江は面白さうに笑つた。

「おい、早く來ないか」

　武雄や忠植は、何か話し合ひながら一町程も先きに行つてゐたが、振り返つて呼んだ。

　文江と石蘭は急いで、兄達に追ひ付いた。

　二人がはあはあと息を切らして急坂を登つて來るのを見て、武雄は、

「きつくはありませんか」

と石蘭に話しかけた。

「いゝえ」

　石蘭は眩しさうであつた。

「あなたは山登りはお好きぢやないんですか」

　武雄はもう一度石蘭に話しかけた。

「支那に居ります時には、よく廬山などに登りましたけど」

　石蘭は九江の女學校にゐた時分に西洋人の先生達につれられて、廬山に登つたり洛陽湖に舟遊びをしたりしたことなど思ひ出してなつかしかつた。

「え、廬山に？」

　武雄は、あり得ないことのやうに驚きの眼を睜つた。

「石蘭はね、父と一緒に支那に行つてゐたんだよ」

と、忠植が説明した。

「すると朝鮮へはいつお歸りになつたんですか」

　武雄は、珍らしさうに石蘭を見凝めた。

「朝鮮で小學校を出ると直ぐ、北京の父のところへ行つたんだ。それから父は廣東の方に行つてしまつてね、石蘭は、九江のミツシヨンスクールに預けられたんだ。そこで女學校を出たわけさ。それから父がつかまつて朝鮮へ護送されると、九江の學校に先生をしてゐた女宣教師が東京へ轉勤することになつたので、石蘭をつれて東京へ行つたんだ」

「すると學校は？」

と云ひかけて、武雄は、出すぎたやうに感じて言葉尻を濁した。

「女子學院の英文科でございます」

　石蘭は恥かしさうに答へた。

「あら、さう？」

　文江は、石蘭の肩に手を掛けて、

「道理で、お言葉が――」

と言ひ澱むところを、武雄が、

「實際おれ達よりも流暢な、本物の東京辧だからな」

と、結んだ。

　石蘭は言葉など讃められることが、面映ゆく感ぜられたが、それでも自分のことが少しづつ武雄に知られて行くのが嬉しかつた。一時に、自分の經歴や心持などすつかり武雄に打ち明けて見たいとは思ふものゝ、それは決して容易なことではないのだ。それは何も、石蘭と武雄と性が違ふからばかりではない。二人の心が互に知り合ふといふことは、一生涯、さうざらにあることではない。それこそ前の世からの因緣ででもなければ出來ないことかも知れない。石蘭は一生涯、自分の經歴や心を武雄に知らさずに終るのかも知れないと思ふと悲しかつた。現在のところ、それは殆んど不可能事に屬するやうであつたから。

　石蘭の經歴といつたところで勿論大したことはない。娘一人支那に行つたとか、東京に行つたとか、そんなものに過ぎないのだが、それでも懷しい人に話したら一帝國の歴史に劣らぬ意義と興味とをもつものもあるのだ。子供心の一寸した悲しみや嬉しさでさへ愛する者達に取つては重大事件である。石蘭はまだ、それらのことを誰にも語つたことがないのだ。はたの人ならたわいもないことだと笑つてしまふかも知れないが、若い魂のあこがれや悩みをば、涙と共鳴とをもつて聽いて呉れる相手に、まだ出遇つたことがないのだ。石蘭はその相手を武雄の中に見出したやうに思はれてならない。しかしそれが可能なことであらうか、石蘭は俯いて、まだ青みさへ帶びてゐない、赤ちやけた若草を見凝めながら下唇を嚙んだ。

　今一息で頂上といふ所に清水が湧いてゐて、その前には少しばかり芝生になつてゐるところがあつた。そこで四人は休んだ。こゝは重い荷物を背負つた人達が一休みする所なのであらう。枯れた芝の葉は粉々に踏みにじられてゐて綠の芽が可愛いゝ尖つた先を枯葉の下から窺かせてゐた。

「もうお傷はお痛みにならないの？」

　石蘭は立つたまゝ文江に訊いた。文江にもそれが、武雄のことを知りたがることだと知れたので、

「あたしは何んともないわ。でも兄はまだ時々腰のところが痛むんですつて」

と言ひながら、兄を振り向き、

「お兄さま。今日はお痛みにならない？」

と訊いた。

「なに、なんともないよ。おれは今廬山を歩いてゐたところだよ」

と言つて一人で笑つた。

「まあ」

　文江は呆れた風を見せた。

「廬山の戰は激しかつたさうだからな」

　武雄は、かう自分の言つたことをまぎらしてしまつた。

　他の三人の想像も中支の戰場に飛んだ。石蘭の眼には揚子江や洛陽湖の濁つた水や、それに反して廬山の渓川の清らかな流れや古いお寺など思ひ浮べた。廬山といふ言葉で、皆の耳には大砲の轟きや小銃のうなりが響いて來るやうでもあつた。新聞やニユース映画で見た戰爭の實況が銘々の眼に浮んで來た。

　三人は言ひ合はしたやうに妙に打沈んで了つた。頬白が鳴いてゐた。

　その日の東家の招待は、忠植や石蘭に取つては感激そのものであつた。大佐も菊子夫人も二人を本當に情愛罩めてもてなして呉れた。始めて日本の家庭といふものを見た二人には、一生涯忘れられない程の深い印象を受けた。その親切さと禮儀正しさとが二人には身に沁みて嬉しかつたのみならず、この一日の會食のために四人の友情は益〃深さを加へた。お互にずつと理解も進んだし、また今まで知れてゐなかつた美しい點も感じあつた。

「うむ、なるほど好い人達だ」

といふ大佐夫妻の賞讃を聞いて、武雄や文江はわがことのやうに喜んだ。わがこと以上にと言つた方がもつと眞に近いのかも知れぬ。

　このことがあつてから間もなく、武雄は入營してしまつたので、兩家間の往來が途絶えた。武雄は○○の機關銃隊から時折忠植に漫畵を書いた葉書などを出したが、武雄は石蘭さんへよろしく、といふ言葉を書くことを忘れなかつた。石蘭は兄から見せて貰つてゐたそれらの葉書の、石蘭さんへよろしく、といふ言葉を深く深く胸に彫り付けた。いつも同じ言葉でありながら、石蘭は、その都度新しい意味を汲み取つたものである。

　七月の或日曜の午後、武雄は一等卒の軍服で、文江と一緒に佛光里を訪ねたが門限があるのでそこそこ歸つて行つてしまつた。しかしその日、武雄はコダツク寫眞機をもつて來て、忠植の家や、家族の寫眞など撮り、最後に、

「石蘭さん、お一人で一つ取らせて下さい。石蘭さんなんてお名前を呼んで、失禮ですけれども、此の方がぶしつけな兵隊さんらしいから、さう呼ばせて下さい」

といつて如何にも素撲な兵隊さんらしく笑つた。

「いゝえ」

　石蘭は何んと答へて好いのか解らなくて唯顔を赤らめたゞけであつた。そして素直に、武雄のカメラの前に立つた。そして自分の、打ち明けられない心までも映るやうにと願ひながら、武雄がシヤツターを切るところを見凝めてゐた。

　それから一月ばかり經つて、八月も終りに近いある日郵便配達人は一封の分厚い手紙を石蘭に渡した。それは忠植宛の武雄からの于紙であつた。石蘭は卽座で開けて見たいのを、ぢつとこらへて、兄の歸りを待つた。

　兄が病院から歸つたのは、もう暗くなつてからであつた。

「お兄さん、東さんから手紙よ」

　石蘭は早速、武雄の手紙を渡した。

　忠植は夕食の膳を前に置いたまゝ武雄の手紙の封を切つた。

「金君。僕は三十日午前八時○○驛發の臨時列車で出征することとなつた。固より男子の本懷であるが恐らく二度と生きて君に逢ふことはないと思ふ。君も折角國家のために盡して呉れたまへ。朝鮮同胞の眞の生命と光榮とが、そこからのみ見出ださるべきことを君ははつきり認識してゐることと信ずる。そして君は御父上を助けて朝鮮民衆の心を迷ひとためらひから、正しい線に引き上げてくれたまへ。そして七千萬と二千萬とががつちりと一體となつて、人類を導くに足る氣高く力強い日本を造り上げることのために君の貴い一生を捧げて呉れることと信ずる。

金君。僕は今やこの身體をば御國のために捧げる命令の下にあるのだ。この生命を祖國の光を輝かすための一の焚木として大陸の祭壇に投ずる時が來たのだ。君も僕のために喜んで呉れることと思ふ。

併し、金君。僕の胸中に抱いて居つた祖國のためのすべての理想や計劃は、失禮な言分だが、これを全部君にお預けして戰地に出る。どうか、金君、これから後は僕の分までも合はせて、二人の働をして呉れたまへ。

　最後にこれは個人的のことであり、今や旣に過ぎ去つて意味のなくなつたことではあるが、僕は御令妹に結婚を申込むつもりで居た。父や母が若し許したなら、已にお願ひしたかも知れない。しかし、父や母によつて代表されてゐるゼネレーシヨンには私達若い者の心持はまだ理解されぬのかも知れない。もつとも今になつて見れば、そんなことを申上げなくて好かつたとも思ふ。

　もう一つこれも個人的のことであるが、文江は君を尊敬してゐる。若し僕が戰死するとしたら、文江は東家のあとゝりになることだし、君も長男であつて見れば、君と文江が結婚するやうなことはあるまいと思ふ。それが文江のためにも、僕のためにも遺憾ではあるが、併しそれは君に取つては大したことではないだらう。君は、御父上が歩まれて來たやうに家の生業を事とせず底の一生を送らるゝことと信ずる。だから戀愛とか結婚とか、そんなことは君に取つては、てんで問題にはならないかもしれない。僕も君にはそれを望んで已まない。とは言へ、日本の一女性が眞心をもつて君を信じ且つ愛してゐるといふ事實だけでも内鮮一體のために深い深い意義があるのではないだらうか。僕はそれを嬉しいことと思ふ。僕が令妹を敬愛してゐるのもこの點で已に十分、目的は達成されてゐるものと信ずる。

　御父上に對しては僕は深甚の敬意を表してゐる。日本の國家が今要求してゐるのは誠と気骨のある人物だ。時勢に諂ふものにはもう食傷してゐるではないか。御父上の如き方は必ずや新しい日本のための大いなる力となられることと信ずる。

　もう一度佛光里へ參り皆様に御暇乞の出來ないのを遺憾とする。君からくれぐれもよろしぐ申上げて呉れたまへ。

健康と奮闘を祈る。東武雄」

忠桶は手紙を讀み終ると、沈痛な顔になつてしばらく瞑目してゐたが、やがて、

「東君が明日出征されるんだ」

と言ひながら、武雄の手紙を石蘭に押しやつた。

石蘭は武雄の手紙を讀みはじめた。兄が食膳に向つてゐるにも拘はらず、讀みも終らぬ手紙を手に握つたまゝ内房を出て次の間に入ると、子供のやうにしやくり上げて泣いた。九江の寄宿舍で、父が捕へられたといふことを聞いた時に祈禱室に入つて泣いて以來これ程泣けたことはなかつた。

石蘭には何が悲しいのか解らなかつたが唯々悲しくて泣けるのであつた。

「石蘭」

と兄の呼ぶのを聞いて

「はい」

と答へるにも鼻が詰まつた。

石蘭は涙を拭きコムパクトで顔を繕つて兄の呼んでゐる部屋まで行くのに隨分手間を取つた。

入つて來る石蘭の顔をちらつと眺めて、忠植は、

「明朝驛へ見送りに行かう」

と、事もなげに言ふには言つたが、彼の顔にはさつきよりも一層興奮の色が現はれてゐた。

「あたしお見送りしても好いでせうか」

石蘭はまた涙が込み上げて來た。

「東君が喜ぶだらう」

「でもお父さまが」

「お父さまには兄さんがお願ひする」

「ではまゐります」

「泣くんぢやないぞ」

「はい」と石蘭はうつむいた。

翌る朝忠植と石蘭とは志ばかりのを持つて驛へ行つた。出征兵士の家族や、見送人やで、驛構内はごつたかへしてゐたが、それでも人々の顔にはしめやかな嚴肅さがあつて、殆んど聲を發するものさへないやうであつた。

群衆の中に、石蘭の朝鮮服の姿が目立つた。やつとのことでプラツトホームヘははいれたが武雄の姿を見付けることは容易ではなかつた。二人がプラツトホームにはいつたときにはもう兵士達は列車に乗り込んでゐて、窓から顔を出しては、しきりに見送人にお辭儀をしてゐた。

「石蘭さん」

と袖を引いたのは文江であつた。文江も石蘭の姿を探してゐたのであらう。文江は有無を言はさずぐんぐん石蘭の手を引いて武雄の母や親類達の立つてゐるところへ引き立てた。忠植も後についた行つた。人々はこの異色の見送人をけゞんな顔で眺めてゐた。

「あゝ、石蘭さん。金君も！」

武雄は列車の窓から顔を出してにこにこしながら何度も頭を下げて見せた。

「金さんからな兄さまに」

といつて文江は忠植が持つて來た包みを武雄に渡した。武雄はそれを受取ると、

「ありがたう。ありがたう。お父さまやお母さまによろしく」

と何度もありがたうを繰り返へした。

「武運長久を祈る」

忠植は太い聲で叫んだ。忠植は胸が詰まるのを感じた。

「ありがたう。頼んだよ。金君、頼んだぞ」

これは手紙に書いてあることだといふことは言ふまでもない。

「よし、引き受けた！」

と言ふ忠植の語尾はふるへた。もしそれ以上ものを云はうものなら聲涙倶に下つたかも知れない。

「御武運の長久をお祈り申し上げます」

石蘭は下げた首をしばしは上げ得なかつた。

「ありがたう。ありがたう。頼みましたよ」

武雄の「頼みましたよ」には涙が伴つた。忠植にも石蘭にもあたりがしんとしてゐるやうに感じられた。

萬歳の聲の中に汽車は動き出した。

「送るもの、送られるもの、まるで誠そのものぢやないか」

　忠植は驛前廣場に出るとハンカチで眼を拭いた。朝鮮人としては、昔のことはいざ知らず今生きてゐるものはこんな感激を經驗したものは多くないであらう。昨夜忠植が父に、武雄の出征のことを告げた時に、父が、

「祖國のためにに出ることほど、男子に取つて感激の深いことはない」

と言つて撫然とした心持ちが、忠植には始めて解つて來たやうな気がした。

「ために戰ふべき祖國をもつたものは幸かな」

忠植はこんなことを考へた。

「石蘭」

　忠植は無言で歩いてゐる石蘭を呼び止めた。

「はい」

「武雄君のために朝鮮紳宮におまゐりしよう」

「はい」

忠植と石蘭の拜んでゐる姿が、朝鮮紳宮の大前に現はれた。これは彼等に取つては、最初の自發的の參拜であつた。忠植も石蘭も長いこと心から武雄の武運長久を祈つた。

二人が參拜を濟まして、深い感慨に沈みながら階段を下りかけてゐると、文江が、

「あら金さん」

と呼びかけたので、二人ははつとして立ち止まつた。東大佐夫妻と、文江とは出征した子のため、兄のため參拜に來るところであつた。二人は大佐夫妻に近づいて首を下げた。

「ありがたう。おゝお嬢さんも。ありがたう。武雄のためにおまゐりして下さつたんですか。ありがたう」

大佐夫妻は心から禮を述べた。

大佐夫妻が、忠植と石蘭に、家に寄つて飯を食つて行けと言はれたけれども、忠植は出勤時間のあるのを口實として辭退した。文江の傍にゐる苦痛を避けたいからであつた。

忠植は佛光里の家へ歸るなり、父の前に出た。

父はいつもの通り書見をしてゐた。

「見送つたか」

「はい」

「どんな様子だつた？」

「泣きました」

「さうだつたらう。祖國のために戰に出ること程男児として感銘深いことはないのぢや。この父も一生涯隨分その機會を望んでゐたのぢやがとうとうなかつた」

永準はいつもの口癖になつてゐる文句を言つては、いつもの深い溜息をついた。

「父さん。私達にも祖國を與へて下さい。ために戰ふことの出來る祖國を與へて下さい」

忠植は父の前に跪づいて、だしぬけに、かう言つた。

老人ははつとする如く、身體を眞直ぐにして我が子の尋常ならぬ顔付きを見凝めた。

しばらくの沈默の後に永準は、

「どうしようといふのぢや？」

といつて眼鏡を外して机の上に投げるやうに置いた。

「も軍醫を志願して出征したいのです。日本をわが祖國と定めて、始めての忠義を盡したいのです」

又しばらく無気味な沈默が打ち續いた。

永準は眼を閉ぢ、ぎゅつと兩拳を握りしめて膝を押へ二三回んだ。それは非常な苦痛を怺へるのか、さをなければ非常な決意をするやうな姿勢であつた。

ものゝ五分も經つたらうと思はれた時、永準は平常の姿勢に返つた。

「よし、行け」

永準の口から出た言葉は唯これだけであつた。

「私が出征しましたら御父さまはどうなさるんですか」

忠植は父の決意の底に探ぐりを入れた。もしかしたら自殺する決心なのではないかと、ふと気遣はれたからであつた。

「俺はどうもせぬ」

どういふ意味かはつきりせぬが父は吐き出すやうに、これだけ言つては口を噤んでしまつた。

九月も半を過ぎた或日、忠植は同窓の他の軍醫二人と一緒に中支戰線へ向つて出發した。

石蘭は兄を見送つてから文江を尋ねた。何事よりも先に、文江に忠植の出征のことを告げる義務があるやうに思つたのであつた。

文江のには軍服姿の武雄の寫眞が床の間に飾つてあつて、その傍には武雄のリユツクサツクだの、ピツケルだのを置き、花瓶には北漢の渓谷などに秋頃能く見られる野菊が挿してあつた。

石蘭は、かういふ場合の作法が解らなかつたけれども、先づ武雄の寫眞に向つて一禮した。そして兄のことを思ふ文江の心の美しさを泌みじみ感じた。

「よく來て下さつたのねえ」

文江はうるんだやうな聲でさういふといきなり石蘭の手を取つた。その指先が氷のやうに冷えてゐた。

「お兄さまからおたよりがあつて？」

石蘭はもう一度軍服姿の武雄の寫眞をちらつと見た。

「まだないのよ。落ち着いて手紙など書いてる暇なんかないんでせう。あつたら石蘭さんにお知らせしないといふことないわ」

「の兄も今日出征したの」

と石蘭はスパリといつた。文江は息も詰まらんばかりに驚いた。

「え、お兄さまが？」

「え、軍醫に志願してね、今見送つて來たところなの」

「まあ、ひどいわ。どうしてお知らせして下さらなかつたの？」

文江は今にも泣き出しさうだつた。

「でも御兄さまもいらつしやらないことだし、態々お知らせするのも、かへつて」

「まあ！　どうして、そんなことないわ」

文江はしばらく悲痛な表情で石蘭をみつめた。併しやつと氣を取り直したといふ風に、

「でも好かつたわ。お兄さま、御國のために出征なすつたんですもの、あらあたし、石蘭さんに、お目出度う申上げるの忘れてゐたわ。御免なさいね。御目出度うございます」

文江は居住ゐを直して、叮嚀に御辭儀をした。

「ありがたうございます」

石蘭もあらたまつて答禮した。

「何時のでお立ちになつたの？」

「三時半の急行で」

「お一人？」

「いゝえ同窓の方と三人で」

「何方の方へいらつしやつたの？」

「天津へ行つて見なくちや解らないつて言つてました」

「ぢや山西へいらつしやるのか知ら。兄も山西らしいのよ」

一問答すむと文江はひどくぼんやりして考へこんでゐた。いきなり、

「母のところ行きませう」

と石蘭の手を取つて立ち上がつた。

母の居間に入るなり、母の菊子に、

「お母さま。石蘭さんのお兄さまが今日出征なさつたんですつて」

と、びつくりしたやうな聲で告げた。文江のあとから部屋に入つた石蘭は菊子に挨拶した。

「お兄さまが御出征？」

「はい、軍醫に志願致しまして」

「それはそれはお目出度うございます」

と菊子はいたはるやうな眼で石蘭をみながら丁寧に手をついた。

「戰線でお兄さま達逢へるか知ら」

さういふ文江の眼には涙が光つた。

「なにしろ、戰線といつても北から南へずゐ分ひろいことだからね」

菊子はこんなことを言つて感慨ぶかさうな眼をした。

「お母さま。石蘭さんの御兄さまのお寫眞を家の御兄さまの寫眞と一緒に飾つて好いでせう？」

「あゝ、いゝともいゝとも。御國のために出征なさつた勇士でいらつしゃるんですから」

菊子はしんみりした調子であつた。

「影膳も御一緒にお供へするわ。お兄さまは金さんと迚も仲よしよ。お気持が合ふと言つていらつしゃつたわ。今にきつと偉い方にお成りになるだらうつて」

文江は思ひ切つてこんなことまで母に言ふのであつた。

二人は母の許しを得て忠植の爲に朝鮮神宮に參拜した。おまゐりが濟むと京城神社にもゆきませうと言つて、南山公園の方に道をとつた。

「――でもあんまりだわ」

文江が先きに口を切つた。

「どうして？」

　石蘭は立ち止まつた。

「お兄さまが出征なさるのにあたし達に知らせないといふ法はないぢやありませんか」

文江は本當に怨めしいと思つた。

「あたしも餘程考へたのよ。でも兄が、お知らせするに及ばないつて言ふんですもの」

「それは、どういふ譯？」

「お見送りして頂くのが濟まないとでも思つたんでせう。それが兄の氣性だわ」

「お兄さま、そんな偏屈な方？」

「親讓りなの」

石蘭は父がどこかへ行くにも、また旅先から歸るにも決して、前もつて通知しないことなど思ひ合はせておかしくなつた。

「でも、あたし一目御目にかゝりたかつたわ」

文江は知らせないでいゝと止めた忠植の心が悲しかつた。

「石蘭さん」

と静かにいつて石蘭と肩を並べた。

「え？」

「お兄さま、あたしのこと何かおつしやらなかつた？」

「いつ？　驛で？」

「いつでも」

「兄はとてもむつつりやよ。自分の思つてゐること、何にも口に出して言はないの。でも、兄は隨分あなたのことを思つてゐるのよ」

「どうしてお解りになるの？」

「でも、春からずつと鬱いでゐたから」

「どんなに？」

「どんなにつて――それはいくら隱したつてわかるものぢやない？」

　石蘭は自分のいつたことが恥かしくなつて首をかしげてくすつと笑つた。

「誰かほかに思つてゐる方でもいらつしやるんでせう？　でなければ、お兄さまは女のことなんかでなやむやうな方ぢやないと思ふわ」。

「他に思つてゐる人なんかないわ。女の人と全然交際がないんですもの。それに――」

「え？」

「それに兄だつて人間でせう。もう二十七。あなたのやうな人とお近附きになれば、それは惱まずにはゐられないわ。兄は、文江さんは實に立派な人だと、しょつちゅう言つてゐたから」

「ほんたうに、さうおつしやつてて？」

「まあ、わたし嘘言ふとお思ひになるの？」

「そんなことないけど」

「こんなことまで言つても好いか知ら、お兄さまから長いお手紙頂いたのよ。御出征の直ぐ前の日に」

かう言ひながら石蘭は、胸が苦しくなつた。

「あなたに？」

「いゝえ、兄宛に」

「きつと石蘭さん、あなたのこと書いてあつたでせう。兄はほんたうにあなたを愛してゐるのよ。父や母に、あなたと結婚すると言ひ出して――。石蘭さん、御免なさいね。こんなこと言ふんぢゃなかつたわ。つひ口をすべらして。御免なさいね」

文江は石蘭の顔色を窺いた。石蘭は妙におどおどしてゐるやうに見えた。

「いゝえ。そのこと言つて下さつてありがたう。お兄さまのお手紙にも一寸そんなことが書いてあつたの。もつたいないと思つたわ」

「兄が結婚申込んだら、あなたはお受け下さる？」

石蘭は唯溜息をつくだけで言葉がなかつた。

「石蘭さんも兄を愛していらつしゃるの？」

「あたし、そんなことあり得ないと思つて、諦めてゐるの」

「そんなことつて？」

　石蘭は顔をらして、涙を呑んだ。武雄の手紙を讀んだ晩、兄から、

「泣くんぢゃないぞ」

とたしなめられたことを思ひ出したのであつた。石蘭の歩く足取りが亂れて來たのを見て、文江は、石蘭の後から手を廻して石蘭を抱へるやうにした。その胸が激しく慄へてゐるのが、文江の手に感ぜられた。文江は、石蘭が年の割に子供らしいのを感じた。

「石蘭さん。泣いちゃだめよ。追つかけて行きませうよ」

と文江は熱情的に石蘭の身體を抱きよせてゆすぶつた。

「どこへ追つかけるの？」

　石蘭は涙に濡れた顔を上げて文江を見た。

「どこへでも」

「あなたも？」

文江はこつくりこつくり肯づいだ。

二人は老松の蔭に立ち止まつてしばらく京城の町や巍峩たる北漢山の峰々が、夕日を受けて秋の空にくつきりと突立つてゐるのを眺めながら默つてゐた。

「石蘭さん。あたし、看護婦にならうか知ら」

文江はだしぬけにこんなことを言つた。

「そしたら戰線に出られる？」

石蘭は文江の心持が解るやうだつた。

「出られるわ。特志看護婦として。それはどこへやられるか解らないけれど」

「ぢゃあたしも一緒に」

石蘭はほつとしたやうににこにこした。

「ほんたう」

「え、行くわ。ほんたうに行きたいわ」

「お父さまがお許しになるでせうか」

「許すと思ふわ。兄も許したから。兄はね、私達にも祖國を下さいと言つたんですつて、父に」

「祖國を下さいつて？」

文江は思はずドキツとした。それは文江に取つては意外な言葉に相違なかつた。

「えゝ、日本を祖國に定めて、祖國のために戰ふことを許して下さいつて」

「それで？」

「さうしたら、父は長い間默つてゐたんですつて、それから、よし、行けつて言つたんですつて。それで兄は行つたのよ」

文江は生れて初めてのやうな感動をうけた。物もいへなかつた。そして文江の眼には涙が光つた。

「私達にも祖國を下さい」と言つた忠植の心持が文江にはよくわかつた。それは朝鮮の人々全體の心持でなければならない。そして召集も受けないのに、新しい祖國に對して始めての忠義をつくすんだといつて、勇躍戰線に出た忠植の心持がとても高いものに思へた。

「石蘭さん」

文江は一足前に歩き出して、石蘭の前に立ち塞がり石蘭の兩肩に手を載せた。

石蘭は手を擧げて、自分の肩の上にある文江の手[を]聢と[[3]](#footnote-3)押へた。

「私達本當に姉妹のやうになりませうね」

　文江はかういつて、石蘭の肩をゆすぶつた。

「ありがたう、文江さん」

　石蘭は、肩の上の文江の手をきゆつと握りしめた。

「兄さんたちが男でやれることをやつてゐるやうにわたし達は女で出來ることをやつて、そして、立派な日本を造り上げて――」

文江はかう言ひかけて何時までも何時までも石蘭の涙にうるんだ眼を見凝めてゐた。（次號へつゞく）　（『緑旗』昭和14年5月号）

（四）

出發

「戰況がとても膠着してますわね」

なんて「膠着」といふやうなことばを若い看護婦たちが覺える程、大別山の戰況は膠着してゐた。金軍醫もほんとうにもどかしくて堪まらなかつた。

　金忠植軍醫は最初は山西戰線に配屬される豫定で天津へ送られたのであるが、山西に轉戰してゐた○○部隊が、漢口攻略戰のため、中支戰線に廻されることになつたので北京の土をも踏まずに徐州を經て幾百里の行軍をして、大別山後方の○○までに來たのであつた。そこで部隊は前線に配置され、忠植はこゝの野戰病院で勤務することゝなつてもう一月近くになる。

「君たち實際氣の毒だね、こゝ一週間殆んど眠れなかつたぢやないか」

と忠植は立ち上りざま大きく背伸びをした。

「先生こそ」

　妹尾看護婦も手術器械などをガーゼで拭いて始末をしながら云つた。

「でも結構ですわ。兵隊さんたち皆さん元氣になられたんですから」

小磯看護婦が洗濯した繃帶を巻いてゐる。

　今日二十人ばかりの負傷兵が、大分快くなつて病院船へ後送されたのであつた。例の○○の激戰後過去二週間ばかりこの野戰病院もごつた返へしたのであるが、今日第三次の後送でまだ動けない患者が十數人殘されたゞけで、職員たちはなんだか張合が抜けたやうな氣持ちになつてしまつた。さうなると欠伸も出る。背伸びもして見たくなる。そして又、今迄に忘れてゐた疲労がどつと一時に出て來るやうであつた。

「ヅドン、ガーン」

と遠い戰線からの砲聲が響いて來るのであるが、それも今では馴れつこになつて、むしろ砲聲が聞えるのがあたりまへで、それが聞えなくなるのが不思議な位であつた。

「先生お休みになりません？」

　妹尾看護婦は手を洗ひながら云つた。

「君たちこそ晝寝でもしたまへ。あんなに大砲がドカンドカンやつてるから今晩あたりうんとまた負傷兵が送られて來るぞ。今の中に休んで置かないと、いつまた休まれるか知れないからね」

　忠植は眞面目な顔でかう云つた。

「先生、どうしてまだ看護婦が來ないんでせうね。あたし達だけぢやどうしたつて手が廻りませんわ」

「實際君たちの働くのには感服したよ。一時は患者さんが七十人もあつたからな」

忠植[が]慰めるやうに云つた時遠くの方からトラツクのエンヂンの音が響いて來た。

「あら、トラツクだわ」

二人は窓のところへ走つて行つた。トラツクと云へば前線からの負傷兵か、さもなければ後方からの輸送車で、懷しい國元からの手紙や慰問袋なども、こんなトラツク便で來るのであつた。

「先生後方からよ。小磯さん行つて見ませう」

かういふ場合いつもイニシアチヴを取ることになつてゐる朗らかな妹尾は、何事にも澁りがちの小磯を引き立てゝ診察室を出た。忠植はぽつねんと一人取り殘された。

室内がしんとして來ると忠植はぐつたりとなるやうな疲努を感じた。眼を閉ぢると椅子によりかゝつたまゝ忠植は直ぐうとうとした。

忠植の夢はとりとめのない斷片の連續であつた。老いたる父や母、石蘭、そして文江等の顔もあつたやうでもあり、ないやうでもあつた。死んでいつた兵隊達やなまなましい血の色などもあつた。

忠植は、中村軍醫が前線へ出てから一人でやつてゐるのだつた。朝から晩まで手術の仕通しで、身體が綿のやうに疲れてゐた。しかし僅か十七八歳の看護婦たちがまめまめしく働いてゐるのを見ると新しい元氣が湧き出るやうであつた。

「先生、看護婦さんが二人着きましたわ」

妹尾ははあはあ息を切らしながら跳び込んで來た。

「さうか。それは好かつた」

忠植は永いこと待ち焦がれてゐた親愛な人にでも來られたやうに本當に嬉しかつた。二人ふえれば患者の手當ももう少しは行き届きさうであつた。傷ついた兵士たちには、醫療の目的以外にも若い女性の柔かい手が必要であつた。若い看護婦が脈を取つて廻つたり、容態を訊いて廻つたりするだけでも患者たちには譬へやうのない喜びを與へるやうであつた。死闘に死闘を續けた兵士たちの荒々しい氣性も、若い女性の優しい看護の手の前には羊のやうに和らぐやうであつた。

やがて新らしく着いた二人の看護婦は水色のワンピースと云ふいでたちで、小磯看護婦に導かれて、一軍曹と共に忠植の前に現はれた。

「あら」

と眞先に叫んだのは文江であつた。

石蘭は恰かも心臓の鼓動が止つたやうにきよとんとして忠植を見擬めた。これが果して、眞に兄の忠植であらうか。こんな偶然が一體此の世にあるものであらうかと疑つてみるのであつた。

忠植は忠植で、しばしは口も利けなかつた。報告のために氣を着けの姿勢でゐた軍曹も、呆れたやうに唯書類を忠植の前に差し出したゞけでゐた。

「よく來て下さつた」

忠植は誰に云ふともなしにかう云つた。

「敗殘兵には狙はれなかつたですか」

これは忠植が軍曹の勞を犒ふ[[4]](#footnote-4)ことばであつた。

「はつ、二度も狙はれました。餘程やつつけたいと思ひましたけれども、任務が任務なので全速力でやつて來ました。誠に殘念であります」

軍曹はさも殘念さうに顎をしやくつた。

「御苦努でした」

の一語を受けて、軍曹は引き下がつた。

忠植と文江も石蘭も、餘りに思ひがけない邂逅にたゞ胸が詰まるやうであつた。それは単に嬉しいと云ふ単純な感情ではなかつた。ことばで言ひ表はすよりも互に見交はした方が餘計に心が通ずるやうであつた。

忠植は、隨分、いろいろと故國のことを訊きたくもあつたけれども、かういふ戰場で、そんな個人的なことを話題にする氣にはなれなかつた。只父の様子だけは早く聞きたかつた。

「妹尾君、これは東文江さん。これは金石蘭、僕の妹です。文江さんは僕の友人で、出征軍人の妹さんだ。兄さんの武雄君も山西戰線からこの邊に廻はされたといふ話だが、今何處にゐるのか解らぬ。この二人はまだ看護には馴れてゐないだらうから、君たち二人でよく仕込んで下さい」

　次には文江と石蘭に、

「妹尾きみ子さんに、小磯きん子さん」

と先輩の二看護婦を紹介した。

　石蘭や文江が來てから一週間ばかり經つてからであつた。大別山戰線に激しい砲聲や爆撃の響が聞えたかと思ふと、翌日の朝まだき多數の負傷兵が、この病院に送られて來た。

　麻城へ通ずる一要衝が皇軍の手に入つたとのことである。

　病院では眼の廻るやうな忙しさで、順々に負傷兵の應急處置を取つたのであるがそれでも、一通り濟んだのは夕方であつた。

　一同しばらくほつとして、朝飯とも晝飯ともつかぬ食事をとつてゐると、一臺のトラツクが着いて、それには更に酷い重傷患者が前線で應急手當だけ濟ましたまゝで運びこまれた。

　忠植は、食事を途中で止めて、また手當にかかつた。

　主に銃創であつたが、一番酷いのは手榴弾でやられた傷で、殊に堡壘に攀じ上る時に上からやられて、顔面や上體が滅茶々々になつたところなどは實に眼も當てられない程無惨なものであつた。それ程酷い傷を軍醫にいぢられながら、味方が勝つて敵のトーチカを取つた有様や、敵軍を切りまくり逐ひ散らした手柄話などしてゐるのを聽くと涙を催さずにはゐられなかつた。

　「軍醫殿。何日位寝てゐたらまた戰に出られますか」

など訊かれる時には忠植も傍にゐる看護婦も胸が詰るのを感じるのであつた。

　しかし、あまりに傷が重くて意識の不明瞭なものもあつたが、そんな兵士の中でも、繃帶を巻かれてゐながら、突然手を高く差し上げて、「ばんざあい」と叫ぶものもあつた。

　顔面全部を繃帶で巻いた、一兵士が擔ぎ込まれた。彼は意識を失つてゐたのだらう、手術臺に寝かされて、なされるがまゝにじつとしてゐた。

顔の繃帶は解かれた。それはまるで血達摩で、顔の輪廓さへはつきりしない程の、酷い榴彈創であつた。忠植は硼酸綿で、ねばねばする血を拭き拭き創を捜した。頬にも、顎にも、鼻梁にも傷があつたが、兩眼が腫れてつぶれてゐるのを見ると、

「眼球をやられたんぢやないか」

と忠植は呟いた。

　途端に傍にゐた石蘭が、

「あつ！！」

と不用意にも聲を出して叫んだ。

「東君ぢやないか」

醫師としての職業意識に熱中してゐた忠植は、石蘭の叫びを聽いて、始めてそれが武雄であることが分つた。そして忠植は一歩後へ退いた。

　顔が腫れて、歪んで居るので、一寸見たのでは見分が付かない程であつたが、よく見れば確かに武雄であつた。

「文江さん、お呼びしませうか」

石蘭の聲はふるへた。

忠植は、武雄が自分達のいつてゐることを聽くのを憚るやうに石蘭を隅の方へ呼んで、

「まだ、お前や文江さんの來てゐること知らさぬ方が好いと思ふ」

と重々しく言つた。

「はい」

　石蘭は病室の方へ走つて行つて文江を呼んで來た。

　文江は、無言で兄の傷ついた顔を視つめて立つた。

　手當がすんで武雄は病室に移された。

　武雄が意識を取り戻したのは翌日晝過ぎであつた。

忠植が繃帶交換をしてゐると、看護婦に云ひ付けてゐる忠植の話聲を聞いたのだらう、武雄は口をもぐもぐさせてゐたが、

「軍醫殿、私の眼は助かりますか」

と聞くのであつた。

「武雄君、大丈夫だよ。僕の聲が分るかね？」

と忠植はピンセツトを手にしたまゝ、武雄の顔に自分の顔を近よせた。

　武雄の顔の筋肉が動いた。

「金君ですか。忠植君か？」

「さうだ、僕だ。君が出征してから一月ばかり經つて僕も軍醫に志願して來たんだ。しかしよくやつて呉れた。君のはたらきぶりは聞いたよ」

「さうか、やつぱり君だつたのか。ありがたう」

　武雄はさぐりさぐり忠植の手を取つた。

「しづかにしてゐたまへ。三週間もすれば、起きられる」

　力強くかう言つて忠植は處置を終へた。

　武雄の容態は不思議な位ずんずんと快くなつた。しかし視力を恢復する見込は全然絶望であつた。一時は眼球を摘出することも考へられたが、そんなことをしなくても好いやうになつた。

　文江や石蘭は武雄が兄弟だからといつて、または、愛する人だからといつて、特にどうするといふこともしなかつたし、又出來なかつた。同じ皇軍の兵士の一人として皆と同じやうに看護するのであつた、併し文江も石蘭も休息の番が來て二人寄ると、手をとりあつて強くならうと誓ひあふのであつた。

　起き直ることの出來ない患者には、看護婦が食事をとらせるのであるが、武雄も勿論、かういふ患者の一入で、時々文江や石蘭が、武雄に食事を取らせる番に當ることもあるのだが、忠植から言ひ付けられたことを守つて一言も口を利かないでゐた。

　或日のことである。石蘭が武雄の傍で飯を食べさせてゐた。急に、

「あなたはどなたですか」

と武雄がいつた。餘り突然なので石蘭はたぢたぢして顔をそむけた。武雄は、石蘭が、口元まで運んで行つて勸める食物を、子供がするやうに口を外方へ向けて拒みながら、もう一度、

「あなたはどなたですか」

と訊いた。

「新しく來た看護婦でございます」

と言ふと石蘭は病室を跳び出して、文江にすがりついた。

　文江は忠植にその旨を告げると、忠植は、

「もういゝでせう。あまり長話はしないで」

といふ許しを得たので、石蘭に、

「あなたも一緒に行つて、兄と一言話しませう」

と誘つたけれども、石蘭は首を振つた。

　文江は、石蘭の心持が分つたやうに一人肯いて病室に入つた。

「お兄さま。文江でございます」

　文江には兄妹相會つて十幾日目に、始めて名乗つたのであつた。

「文江、お前が來てゐたのか。よく來て呉れた。お父さまは出征なさつたか」

「文江が出發する時にはまだでしたけれど、近い中には出征するよつて、おつしやつてましたわ」

　文江は殘りの分の食事を勸めたけれども、武雄は食べようとはしなかつた。

「文江」

「はい」

「さつきこゝでおれに飯を食べさせてゐたのは誰だ？」

「お兄さん、あれは石蘭さんなの。二人で來たんですの。お兄さまに私達の來たことを知らしてはいけないつて、先生から言ひ付けられて、今まで隱してましたのよ」

　武雄はそれつきり默つてしまつた。幾分横向きになつて食べやすい形をしてゐた體を、仰向けに直すと、石像のやうにからだを硬ばらせてしまつた。鼻から上は繃帶で包まれてゐたので、武雄の表情を讀むことは出來なかつたが、文江には兄の身體全體からその氣持をよみとる事が出來た。

　文江には何んと言つて、兄を慰めていゝのか分らなかつた。

「お兄さま、さあお食事をもう少し召上つて」

と卵の半[熟]にしたものを茶匙で取つて武雄の唇へ當てた。

「もうやめた」

「どうして。わたしたちがお傍についてゐるから、召し上つて」

「今日はやめた。文江、もういゝから向ふへおいで」

「お兄さま！」

文江はやつと涙をこらへた。

「お兄さま――ねえ、もつと召上らなくちやいけないわ。早く御元氣になつてまた戰線に出るんでせう」

「もう戰線になんか出られやしないよ」

「そんなことないわ。あと二週間もしたら起きられるつておつしやつてらつしたわ」

「起きることは起きられるだらうさ、だけど、おれの眼はもう駄目だよ。眼のない兵隊が戰爭が出來るか。しかし文江、おれは盲目の兵隊にな[り]戰つて見せるつもりだ」

　武雄は泣いてゐるやうであつた。

「長話をしてはならない」といふ忠植の言葉を思ひ出した文江は、

「ぢや、お食事は下げませうか」

とすなほに手にしてゐた卵の匙をおろして、首をかしげて見えない兄によびかけた。

「うむ、夕飯をどつさり食はう。文江、心配するなよ。――もういゝ。一寸興奮したんだ――夢みたいだなあ」

　武雄は文江にやさしくいつた。

　或日忠植が廻診に來た。

「金君、はつきり云つて呉れたまへ。僕の眼はもう駄目だらう」

　武雄は、もうベツトの上に起き直ることも出來る位になつてゐた。

「もう暫くだよ。君は國へ返へされることゝ思ふんだ。京城へ行つたら充分治療も出來るだらうから、まあゆつくりしてゐたまへ。やつぱり眼科の專門醫でないとね」

　忠植は、かう言つて武雄を慰めようとしたが、武雄は、そんなことでごまかされはしなかつた。

「いや、君。そんな嘘は言はないでくれたまへ、僕はね、もし眼がどうしても[駄]目だと分つたら、考へることがあるんだ。國へなんか歸るものか。おれは歸るつもりはない。だからはつきりしたことを言つて呉れたまへ」

「考へることつて何んだね？」

　忠植は梢々驚きの語調で問ひ返へした。

「いや、何も君に心配をかけるやうなことぢやないよ。おれは盲目で出來る戰をして見ようと思ふんだ。どうだね、僕の眼は駄目だらう。もう視力を恢復して銃の照準を取るといふやうなことは出來ないだらう？　しかし僕は、盲目になつたつて、決してがつかりなんかしない。唯盲目で出來る仕事の計畫を立てるだけなんだから、はつきり言つて呉れたまへ、頼む」

　武雄の言つてゐることの内容は悲壯極まるものではあるが、その態度はむしろ冷靜な程、落着いてゐた。忠植には、その中に武雄の、毅然とした人格の光を見ることが出來た。これ程の人格者を凡人並みに取り扱つて、容態を隱したり、文江や石蘭の來てゐことを知らせなかつたりした自分の態度が淺ましいやうに感ぜられた。

「ぢや、言はう。君の眼はもう再び視力を恢復することは出來ないのだ」

と、言渡した。

「やつぱり、さうだつたか」

　武雄はさすがに、暫く默つて首をたれた。しかし直ぐ氣を取り直して、

「全く奇緣だね。僕がめくらになつて大別山麓で君や石蘭さんの世話になるなんて、全く夢だな」

と冗談のやうに輕く言つて聲を出しで笑つた。

　大別山戰線は、一しきり進捗を見せたものゝ、敵もさるもので、仲々頑強に抵抗や反撃を續け、ふたゝびもどかしい膠着狀態に入つてしまつた。北部に進んだ線が京漢線の信陽を陥れても麻城へ通ずる戰線は仲々はかどらなかつた。そのために傷兵の數は減つたが、焦慮は日に日に増して行くのであつた。

　もう九月も半を過ぎて、流石に炎熱は去つたが、その代り夜間は温度がぐつと下がつて零度近くなることさへあつて、將兵には新しい苦勞が加はつた。

　何んとかして、局面を打開しなければならなかつた。

　武雄は、視力の恢復が絶望だといふことが分ると、その盲目を利用して、戰況を有利に導く方法はないものかと、日夜心を砕いてゐた。武雄の胸中に去來するものは、宣撫工作をすることと、また、敵陣に入り込み敵將を説き付けて、歸順させることとであつた。日本の眞意とアジアの大勢を説けば、心ある敵將の中には、理解するものがないとも限らない。そして、若し敵の一小部隊を歸順させ得たとすれば仲々大仕事であるし、よしやかゝる工作が失敗に歸したところで、自分の身體一つを犠牲にするまでのことだと、思ふのであつた。

　同室の傷兵達が、戰線へ戰線へとあせつて、軍醫を手古摺らせてゐるのを聞くたびに、武雄は、自分の廢殘の身體を提げて、御國に役立つ何事かを、仕遂げなければならないといふ決意を新たにするのであつた。

　或日武雄は、石蘭に人杖になつて貰つて始めて庭に出た。こゝ四五日來室内で歩く練習をしたので、脚のふらふらすることは幾分減つたが、廣い空間に出たのだと思ふと、自分に視力のないことが、一層痛切に感ぜられた。何處を見ても眞闇で光も形もない世界だ。足でどこを踏んで好いのか、顔をどつちへ向けていゝのか、さつぱり分らない。唯筋肉の感覺で足を上げては下ろし、また上げては下ろすのである。自分の顔が正面に向いてゐるのかどうかを試さうとして、桑を探してゐる蠶の頭のやうに、首を動かして見るが、筋肉の感覺だけでは何が何んだかはつきりしないので、武雄は思はず俯いてしまつた。もう首を眞直ぐに持たなくちやならない必要もないやうであつた。そして石蘭の肩に片肘を掛けて石蘭が導くまゝに、自信のない足どりで歩いて行くのであつた。

「空は晴れてゐますか」

　武雄はいくら、一人で、天氣のことを判じて見ようと努めても駄目だつたので、つひに石蘭に訊いたのである。

「えゝ、とてもよく晴れてゐますわ。雲は一つもなくつて、京城のやうに眞青ですよ」

　石蘭はさういひ乍ら胸が迫つた。

「さうですか」

　武雄は日光の感觸を探らうといふやうに顔をあつちこつち動かしてゐる。

　石蘭は靜かに方向を轉じさせて、武雄が眞正面に太陽に向ふやうな位置に立たせてやつた。

「うむ、こつちにおてんとさんがあるんだな――ふしぎに日光の感觸がある」

と武雄は嬉しさうにいつた。

「うむ、やつぱり少しは光が見えるやうだ」

「あなたはお眼に繃帶をしていらつしやるんですもの」

「はゝゝゝ。繃帶をしてゐたつてゐなくつたつて、僕の眼は同じですよ」

　武雄は寂しく笑つた。

「もうお疲れでせう。歸りませうか」

　石蘭は、武雄に、光に對する悲しみをこれ以上味はせるに忍びなかつた。

「いや、いや。まだ疲れやしません。もつとあるかせて下さい。光の中にゐると思ふだけでも嬉しいんですよ。山も見えるんですか」

　武雄は山を探すやうに首を廻らした。

「はあ、西と北は何處も山ですわ。でもぎざぎざした山ではないの。ほら向には紅葉になりかけてゐる木も見えます」

「さうですか。北漢山の紅葉はまだかなあ」

「え、十一月に入りませんとね」

「さうだつたな。もう二度と仁壽峰には登れないな。もう一度あれに登つて、雨に逢つて、それから風に吹き飛ばされて、石蘭さんに看護して貰ひたいな。はゝゝゝ。駄目となると尚更ね」

「何故そんな風におつしやるの？　朝鮮へ凱旋なすつたらあたしいつでもお手を引いて北漢山でも仁壽峰でもどこへでもお登りになるやうにしてあげますわ」

「本當ですか」

「………」

「本當に僕の杖になつて下さるんですか」

「なつて上げますわ」

「ありがたう。しかし」とは立ちどまつた。

「それはこの場限りの話ですよ。いや、そんなことはあり得ない。そんなことかあつてはならない」

　武雄は何か強く否定する如く首を打振つた。

「何がでございますの。どんなことがあつてはならないと、おつしやるんですの？」

　石蘭は興奮してゐた。

「いや、あなたが僕の人杖になんかなつちやいけないつていふのです」

「なぜ、いけませんの」

「第一僕は、めくらですよ。その上支那を離れない決心ですよ。もう二度と國へ歸らうと思つてゐません」

「ぢや、どうなさるつておつしやるの？」

「僕は宣撫官にならうと思ふんです。盲目の宣撫官がいけないといふんなら、僕は自分勝手に宣撫に出かけるつもりです。支那の人を一人でもよけい日本の味方にしようといふんですよ。若しうまくいつて敵將を一人でも說伏せることが出來れば戰爭して勝つのと同じでせう」

　武雄の口元には滿足さうな微笑が浮んでゐるのであつた。

「それはすばらしいことですわ」

「石蘭さんも賛成してくれますか」

　石蘭はそれには答へないで、ありつたけの優しさで武雄を見上げたが直ぐ瞳をおとして歩調をゆるめた。

　武雄も石蘭について歩いた。無言であつた。

　やがて石蘭は立止まつた。武雄も止まつた。

「賛成しますわ」

「ありがたう。僕まだこの計畫誰にも話したことはないんです。石蘭さんに始めて打明けたんです」

「ありがたうございます。もしわたしでお役に立つことでしたらどこまでも御供致しますわ」

「それは本當ですか」

「本當ですわ。それにわたし、支那語も話せるんですもの」

「死地に入るんですよ」

「よく承知して居ります。お傍で死なして戴きますわ。それがわたしの――わたしの本望ですもの。こゝまで來たのもその爲ですもの」

　石蘭には、この時、内氣も、控へ目もなかつた。

「石蘭さん」

　雄は些さか心の平靜を失ひかけてゐた。

「はい」

「本當に僕と一緒に支那人の中に――いや支那軍の中に入つて下さるんですか。僕はあなたのおつしやることを本氣にしますよ」

「どうぞ。わたし、もう前から決めてゐました」

「ありがたう、ありがたう。石蘭さん、ありがたう」

　石蘭は目の見えない武雄に寄り添つてこの儘天も地も消えてもよいと思つた。

「おい東君。こんなとこまで來ていゝのか。つかれないのか？」

　忠植が豫防衣姿で現はれた。

「うむ。大丈夫だ。アジア大陸を股にかけて歩き廻れさうだ」

　武雄は力強くばたばた二三歩歩いて見せた。

「もう歸りませう」

　石蘭は武雄の腰を抱へるやうにして方向を換へた。

「いつまでも、かうして、石蘭さんに縋つて歩きたいな。眼が見えなくなつたお蔭で、この幸福が得られるんだ」

　武雄の聲は子供のやうに甘えてゐた。

「いつまでも、どこまでもおせわしますわ、わたしの眼はあなたのものよ」

「――濟まないな」

「すまないなんておつしやつてはいや。わたしも幸福なんですもの」

「ありがだう」

武雄の頬には涙が見えてゐた。

　武雄の願が納れられて、部隊長の大山少将は武雄が傷の直り次第、自由に敵軍懷柔工作に出ることを許し、石蘭は軍屬に配せられた。そして、少將自身媒[酌]といふ形で、武雄と石蘭とは形ばかりの假結婚の式を擧げた。

　「嚴父の東大佐には俺から責任もつて、いゝやうに話さう。二人ともしつかりやつてくれ」

と二人を励ますのであつた。

　武雄、石蘭の二人が支那人の避難民に化けて、大別山の南口さして○○野戰病院を出發したのは九月の末であつた。

　忠植と、文江とは、まだ夜明け前の暗い道を十町も歩いて、武雄と石蘭とを見送つた。なるべく人目に立たないやうにと用心してである。

「さあ、こゝいらで別れるとしよう」

と武雄は立ち止まつた。

　暁の室氣は霜そのものゝやうに冷たかつた。

「お兄さま。さやうなら。文江さん、さやうなら」

　石蘭も一々別れの挨拶をした。

「武雄君しつかり慎むよ」

　忠植は、武雄の兩手を握つてふつた。

「石蘭といふマスコツトがついてゐるから大丈夫ですよ。漢口で逢ひませう」

　武雄は愉快に笑つた。

「お兄さま、お姉さま御機嫌よう」

と文江がいふと武雄は二人の方に顔を向けていつた。

　「文江、お父様お母様を頼むよ」

　忠植と文江は聲をのんでうなづいた。

　實際文江の石蘭に對する認識は幾度か變つた。最初は、朝鮮娘といふ好奇心が主となつてゐたのであるが、だんだんと深く交はるにつれて、石蘭の心に限りなく美しいもののあることがだんだんと發見されて來るやうに思はれた。無口で内氣で時には鈍感にさへ見えても、その中には凛とした氣節と熱情とを含んでゐることが解つたのであつた。忠植についても同じことが云へた。文江は、忠植や石蘭が、それ程の氣高い心を蔵してゐながら、文江に對してさへ、常に控目にしてくれる氣持を悲しく思つた。

　石蘭は、今度武雄に從つて死地に入ることについても實に、何んでもないあたりまへのことをするやうな、手輕さや平氣さでふるまつてゐるやうに文江には見えた。

「お父さまやお母さまは嘸御心配なさることでせうね」

と文江が忠植に言ふと、忠植は輕く笑つた。

「父は喜ぶでせう。あゝいふことが好きなんです。心を許した人のために殉ずるのが女の道だといつも思つてゐるんです。春香思想ですな」

　二人が壯途に登つてからの文江は、大膽に忠植をいたはつてまめまめしく、身の廻りの世話をした。古くからゐる看護婦達も今では忠植に對する認識を改めてゐた。もう例の「朝鮮人が」といふ、微妙な心持を清算してしまつたのであつた。彼等は石蘭を英雄の如く尊敬し、石蘭を通じて、朝鮮人全體を再認識して來たのであつた。

　忠植は、看護婦たちのかういふ心持を汲むことが出來て、それがたまらなく嬉しかつた。これだけでも石蘭は生き甲斐があるのであり、また、不幸にして生きて歸れなくても、死に甲斐があると思つた。

　武雄石蘭の二人が、皇軍の歩哨圈を通過して敵中に入つたといふ報知が來たのは、出發後三日目のことであつた。然し、それからは杳として消息がなかつた。よしや二人が死んだにしても、それが、我が軍へ知らされることはもはやあり得ないであらう。（つゞく）（『緑旗』昭和14年6月号）

（五）

敵を訪ねて

武雄と石蘭は秋の山道を歩きつゞけた。高く上る程秋は深かつた。ところどころ森といふ程でもないが濶葉樹の茂みもあつて、その葉が紅く黄色く霜に染まつてゐる。

「あら紅葉があるわ」

　石蘭は何か珍しいものがあれば、必らず武雄に告げた。

「さうか」

　武雄は自分にも見えるやうに嬉しさうに微笑んだ。

　谷間には小さな畑もあり、貧しい茅屋もあつたが人はゐない。いづれかへ避難したのであらう。

　二人は二三度支那兵の歩哨に誰何されたが難なく通ることが出來た。哀れな避難民に見えたのであらう。盲目の男と若い女と、支那の旅人風に風呂敷包を肩から斜にかけた姿は、大して注目を惹かなかつたらしかつた。

　しかし蘇家集の町に入つたとたん二人は、とうとう歩哨線に引掛かつてしまつた。武雄はこゝが師長駐在地であることを知つてゐる。この師長こそは、武雄に取つては第一回の取組相手となるべき敵手だ。若し一ヶ月以前の情報に間違がないとすれば、こゝの師長は、もと張學良の部下として奉天の北營にゐたこともある楚璽といふ馬賊上がりの男である筈である。一騎討の相手としては、その知識の程度が危まれるけれども、綠林の豪傑として、案外に話せる男かも知れない。

　武雄は、旣に目的地に達したからには、今更身分を隱くす必要もないと思つた。

「誰だ？」

と、両方から銃劍を差し出して、道を遮つて訊かれたに對し、武雄は、

「私は大日本帝國の國民で東武雄といふものです」

ときつぱり云ひ放つた。

　石蘭の通譯が終ると、哨兵達の顔は俄かに殺氣立つた。

「日本人？」

　曹長とおぼしき者が跳び出して來た。かれは刀を佩いてゐた。

「さうです。日本人です」

　武雄はもう一度力強く答へた。

「日本人。日本人」

と五六人の兵士たちが口々に珍らしさうに二人を取り捲いた。

「何者だ？　日本の間諜か」

　曹長は威丈高になつた。

　「私は間諜ではない。あなたがたの將軍にお會ひして話さねばならない重大なことをもつて來たのです」

「將軍に？」

「さうです。將軍以外の方には話すことの出來ないことです。どうぞ私共二人を將軍のところへ連れて行つて下さい」

　彼等は一應武雄たちの荷物や身體の檢査をしたが別に荒々しいといふ態度ではなかつた。

「お前も日本人か」

と石蘭に訊いたので、石蘭がさうだと答へると、曹長は、

「支那語がうまいね。支那人そつくりだ」

と讚めて笑ふ程の餘裕までも示した。他の兵士たちも石蘭をじろじろ眺めてはにやにや笑つた。石蘭は一瞬恥かしさや腹立たしさを感じたが、今はそんなことを氣にするやうな場合ではないと氣が付いて、につこりと笑つて見せた。

　支那兵たちは上氣嫌のやうであつた。そして武雄たちを縛りもせずに引き立てた。

　どこへ連れて行くのか解らない。二人は、決意の中にも一抹の不安がない譯ではない。

　往來を通ると物見高い支那人たちがぞろぞろ遠巻きに武雄たちの一行について來た。兵士たちは群衆を逐ひ散らさうともせす、かへつて群衆の問に答へるやうに、

「大膽な奴等だ。二人して敵陣中にのそりのそり入つて來るなんて」

などのんきに説明してゐた。

　石蘭は、最前線たる、この地で、これ程、平氣でゐられる支那人たちの氣持が分らなかた。のんきなのだらうか。馬鹿なのだろうか。それとも日本軍はこゝまでは絶對に入れぬぞと云ひ聽かされて、安心してゐるのだらうか。石蘭は、この情景を餘程武雄に説明してやりたかつたけれども、兵士たちや群衆に刺激を與へることを慮つて默つて、武雄の手を引いて、兵士たちの逐ひ立てるまゝに脚を運ぶのであつた。

　武雄たちが引張られて入つたのは、瓦色の煉瓦建の汚い兵營であつたが、師團司令部ではなさゝうで、精々中隊長の營門位に見えた。

　こゝでも妙な装をした、ひよろひよろな兵隊たちが、集まつて來ては二人をじろじろと眺め、護送して來た兵士たちに馬鹿々々しい質問をしては面白がつてゐた。

　二人はがらんとした一室に通されて、板の腰掛に掛けても好いと云付けられた。見物人の兵隊達が四五人も二人を取り巻いて、喋り出したが一體何んのために、そんな馬鹿々々しいことを喋つてゐるのか氣が知れなかつた。この町にもところどころ貼られてゐる、打倒何んとか云ふのも、彼等に取つては風馬牛なのであらう。もつとも彼等には、その字さへ讀めないのかも知れない、と石蘭は、後で二人きりになつた時に、武雄に説明してやるべき、材料を記憶に止め、且整理しながら、のんきな支那兵たちの見せ物に晒されてゐた。

　やがて、草色の軍服に刀を佩いた青年將校が入つて來ると、見物人の兵隊たちは、神妙にも直立擧手の禮をして、未練さうに、後を振り返りながら出て行つてしまつたので、二人を引き立てて來た兵士二人だけが殘つた。

　「お前たちは何者だ？」

　青年將校は威嚴を繕つて訊問口調であつた。

　武雄は先刻歩哨たちに話した通りのことを告げた。

　「ヒン。タマナカビー」

　靑年將校はまづ吐き出すやうにいつた。

　「殺してやるぞ。ヒン」

と敵意を持つた眼で二人を睨んだ。さすがは將校で、敵愾心をもつてゐるな、と石蘭はぞつとしながら、武雄にそのことを通譯して聽かせた。武雄は何を思つたのか微笑して、「殺されても好いが、あなた方の師長さんに會はして下さい」と云つた。

「師長に會つて何をする氣か」

「會つて話さなければならない重大なことがあるのです。それはお國のためにもなり、東洋全體のためにもなることなのです。あなたのためにもなることです。是非一刻も早く師長に會はして下さい」

「この二人を營倉に打ち込め。逃がしてはならんぞ！　手足を縛つて置け。こいつら何を仕出かすか解りやしない」

　將校は二人の兵士にかう云ひ付けて、テツと唾を吐くとすたすたと出て行つてしまつた。

　將校が立ち去ると、何處に隱れてゐたのか先刻の見物人の兵士達がどやどやと入つて來た。

「この二人を縛つて營倉に入れろつてよ」

「この別嬪さんはおれが引つ張つて往くぞ」

「何んだ。こんな盲目なんか縛らなくつたつて逃げられやせぬぢやないか」

「餘計なこと吐かすな。早く縛らぬか」

　こんなことを罵り合つて、がやがや一くさり騒いでから、ひょろ助の伍長が石蘭の兩手をむづと摑んで、

「ついて來い。この尼つちょ」

と呶鳴つた。

　武雄も縛り上げられた。

　二人は手足を縛られて倉の樣な土間に投げ込まれた。

　兵達はしばらく馬鹿々々しいことや、石蘭に關した淫猥なことなど、喋つてゐたが、しばらくして靜かになつた。それでも番兵だけは時々テツと唾を吐く音や、肺が惡いのかごほんごほんと咳をしてゐるのが聞えた。

「別々に入れられないだけありがたいわ」

　石蘭は武雄の方に身體を辷らしながら云つた。武雄は默つてゐた。

　石蘭はやつとのことで武雄の傍に摺り寄つて、武雄の肩に凭れた。

「でも、しんみり二人きりでゐられるのね」

　石蘭は聲を出して笑つた。聲を出さないと武雄には石蘭の表情が解らないと思つてだつた。

二人は、この町に辿り着くまでに、途中で二晩泊まつたのであるが、最初の日は空屋で、次の日は老人夫婦だけの家に泊めて貰つた。老人はまだ辧髪を垂れてゐて、子供は兵隊に行つてゐると云つて居つた。大變親切にしてくれたので武雄が一圓紙幣三枚やつたら、老人も老婆も迚も喜んで、合拳（合掌ではない）をしてお禮をいふのであつた。

「汚いところだけれども歸りにまたお寄りなせい。あんなに眼が見えなくちゃ嘸不便ぢやろのう」

とか、

「兵隊たちに惡者がゐるからお氣を付けなせいよ。お若い女の身で旅は險呑だて」

とか、いろいろいつて呉れた。それから汚い木綿の切れに鵝鳥の卵を二つ包んで石蘭の手に握らせて呉れた。

「何を考へていらつしゃるの？」

　石蘭はじれつたさそうに、自分の頭を武雄の頭にこつんと當てた。

「あのお婆さんは親切だつたな」

　武雄はしんみり云つた。

　「あのお婆さんのこと考へていらつしゃつたの？」

　「うむ。何も他に考へることないぢやないか。何んだか眠くなつて來たよ」

　武雄はフフと笑つた。

　「ぢやおやすみなさい。わたし、膝枕にしてあげるわ」

　「きみも疲れたらう。あの爺さんの家の南京蟲には弱つた」

　武雄は大きな欠伸をした。

　「お休みにならない？」

　石蘭は不自由な手で武雄を寝かして、その頭を自分の腿の上に載せてやつた。そして自分も武雄の胸に顔を當てた。武雄の心臓の鼓動を聽きながらじいつとしてゐると、石蘭は自分が今どこにゐるかを忘れるやうであつた。よほど疲れてゐるのだらう。武雄はすぐ眠つてしまつたやうであつた。

　石蘭はそつと顔を上げて、武雄の寝顔を覗き込んだ。彈痕のあとが複雜な皺襞や凹凸をなして昔の俤もない。そのすうつと通つてゐた鼻梁までも歪んでゐる。石蘭は今更のやうに涙を呑んで顔を外らした。

　ものゝ一時間も經つたらうか。或はそれよりも短かい時間であつたのかも知れぬ。がつちやりと鍵を開ける音がすると見馴れない兵隊がぬつと顔だけを室内に入れた。

「へん。味なことやつてゐやがらあ」

と云ふが早いか跳び込んで來て、横になつてゐる武雄の脇を蹴つた。

「起きろ、起きろ」

　石蘭は、支那兵が入つて來る前に、武雄を起してやらうと思つたけれども、手足が縛られてゐては、どうにもならなかつた。

　「こら起きろ、づうづうしい奴だな。寝てゐやがるなんて」

　支那兵はとてもぷりぷりしてゐた。

　「貴様たち今に殺されるぞ。づどんと一發でころりと南無々々だぞ」

　二人は營舍から引張り出されて、足を縛つた紐だけは解かれて、銃劍付の四人の兵士と一人の軍曹か何かに物々しく護衛されて、埃の立つでこぼこ道を十數町も引かれて行くと、町外れに煉瓦塀に繞らした兵營風の建物があつて、番兵の立つてゐる門が見えた。

　「大きな兵營のやうよ。正門に番兵が立つてゐるわ」

と石蘭に云はれて、武雄は内心しめたと思つた。師長の前に引き出されるのであらうと、武雄は楚璽とやらの、支那人面を想像して見た。多分鬚はないだらう。或は閻錫山式の口鬚を生やしてゐるのかも知れぬと思ふと、何んだか可笑しくなつた。

　さすがにこゝは兵營らしい嚴肅さがあつて、見物人の兵隊たちがぞろぞろついて來ることもなく、廊下を歩いてゐる丸腰の士官たちも軍人らしい顔をしてゐた。たゞその人たちの胸がへこんで、顔は青白く、口元に締まりのないのは、何處でも同じことであつたが、たまには、一見日本人と變らないやうな引き締まつた容貌をしたものもあつた。

　武雄たちは階上の一室に通された。それは中々綺麗な部屋で大きなテーブルや、古ぼけてはゐるがビロード張の椅子さへあつて、それが師長とやらの應接室だらうと石蘭は思つた。室内へ入つてからも四人の兵隊は銃劍のまゝで立つて居る。

一時間も待たされたあと、六尺もあらうと思はれる太つた男が現はれた。しかも精悍の氣が眉宇の間に漂つてゐて如何にも大陸的な風丰であつた。肩章の銀モールの上に大きな星が二つ付いてゐることから見て、また護衛の兵士達がばね仕掛のやうに捧銃をすることから見て、これは師長の楚璽その人に違ひないと石蘭は思つた。楚璽つてどんな人間だらうとそれを氣にしてゐた武雄に、その風丰から説明してやりたかつたが、私語をするのが惡いと思つてやめた。

　楚璽がどつかと中央の椅子に腰を下ろすとついて來た參謀か副官だらう、二人の將校が陪席判事然として、楚の兩側に坐つた。

「師長らしいわ」

　石蘭が武雄の耳に囁くと、武雄はつと立つて、禮をしたが、楚は首を一寸こつくりさせただけであつた。

　「師長閣下ですか」

　武雄から先に口を切つた。

　石蘭が通譯をすると、師長は、

　「シ、（さうだ）」

と如何にも横柄な語調で短く發音した。

　「私は大日本帝國の東武雄であります」

　「日本の軍人？」

　楚は驚いたやうに眼を丸くした。

「さうです。大別山戰線で負傷して盲目になつたものであります」

「何用で來たのか。軍使として來たのか？　日本軍は中國軍のために散々な目に逢つて敗退したさうであるが、そなたは降服を申込みに來たのか」

　餘りのことに石蘭は吹き出しさうなのを怺へて、その意味を武雄に云ひ聞かせた。

　武雄は石蘭の通譯を聽きながら、一語一語肯いてゐた。

「中國軍は南京も奪還したぞ。知つてゐるか、上海も已に包圍されてゐる。わが空軍は東京、大阪を爆撃して、日本は今や大混亂に陥つてゐるぞ。知つてゐるか」

　楚璽が真似目な顔で、こんなことを云つてゐるのを聞くと、さすがの石蘭もびつくりした。

　武雄は石蘭の口から、楚璽の言つたことを聽き終ると全然無表情で大きく二つ頷いて見せた。

「さうだらう。そちも知つてゐると言ふのか。我が軍は遠からず、日本本土までも攻略するつもりぢや」

　楚璽は最後には見得を切つた。

　彼の言ふことは冗談と思ふには餘りにその態度が眞面目であつたし、また信念に燃えてゐるやうでもあつた。

　武雄は呆氣に取られた。餘りのことに、どうしたものかと迷つたのである。

「只今閣下のお話を拜聽すると、本當に私が、こゝへ來て好かつたと痛感致します。それは、私が若し來なかつたとしたら、閣下は大變な不幸に遭遇されるに違ひないからです。南京は支那軍に奪回されるどころか日本軍司令部の所在地であります。上海が支那軍に包圍されるなど思ひもよらぬことで、漢口も今月中には日本軍の手に入るでせう。或は後四五日で漢口が陥るかも知れませぬ。既に京漢線は信陽に於いて、日本軍によつて遮斷されてゐるのです。日本軍がこの蘇家集を通過するのも間もないことでせう。日本軍の有力なる大部隊が、もうこゝに迫まつてゐるのです。日本軍は支那國民を敵とする考は毛頭ありませぬ。それどころか、日本は支那を兄弟と思つてゐるのです。兩國民は、唇齒輔車の關係で、仲好くしなくてはならない運命にあると信じてゐるのです。唯蒋介石政府が、共産黨や英佛の傀儡になつて先づ支那國民を毒し、引いては東洋全體の安寧平和を紊すから、日本軍はそれを膺懲するだけです。私が、身命を賭して、こゝまで參りましたのは、吾々兄弟同無益な流血の滲事を繰り返へすことを止めて、正しい認識と理解の下にお互に手を握り合ふためであります。良藥は口に苦く、忠言は耳に逆ふと言ひます。私の真實の言が、閣下の御耳に逆ふかも知れませぬ。しかし日本武士は決して嘘をいはないものです。もし私の申上げたことに不審がおありでしたら、いくらでも事實をもつて證明しませう」

　楚璽達は、武雄が熱心に述べてゐるところをぢつと聽いてゐた。彼等の表情にも何か重大性を感じてゐるやうであつた。武雄の力強い、落着いた陳述には、權威と悲痛さが籠つてゐたからであらう。

　石蘭は一生一代の大役だと思つた。生れて以來これ程重大な役割を演じたことはない。石蘭は何んとしても武雄の心持ちを敵將に徹底させなければ已まないと決心した。そして立ち上がつた。

　石蘭が武雄のいつたことを順次に譯して行く中に楚璽達のや顔色が幾度も變つた。時には驚くやうでもあり、また時には、直ぐさま跳びかゝりさうな劍幕をも現はした。一人の副官は拳を握りしめて卓を叩いた。石蘭の女性的な聲や身振の優しさが、彼等の憤激の情を和らげなかつたならば、或は、劍を技いたかも知れない。

　「蒋介石政府が共産黨や英佛の傀儡になつて」云々のところに來ると、楚の左側にゐた、痩せぎすの將校は、

　「默れツ！」

と聲を震はして立ち上がつた。

　石蘭は一寸言葉を切つた。

「好い、好い。さあ皆言へ」

　さすがに楚璽は將校を制して石蘭を促がした。

「兄弟同無益な流血の慘事を繰り返へすことを止めて正しい認識と理解の下にお互に手を握り合ふためであります」

といふところに至ると、紳経質の將校も首をうなだれた。

　不審の點があつたらいくらでも事實を以つて證明して上げます、といふ意味の通譯が終ると楚はぷいと席を立ちながら、

「この二人を監禁して置け。明日もう一度取り調べる」

と言ひ棄てると出て行つてしまつた。

痩せた將校は楚のあとを追つたが、今一人の丈の低い、廣東人のやうな顔をした將校は後に殘つた。

「本當に日本は吾々支那を兄弟と思つてゐるのか」

「本當に非併合非賠償で行くのか」

「本當に日本の大部隊が蘇家集にも迫まつてゐるのか」

など心配さうに武雄に訊くのであつた。彼の心でも蔣政権の宣傅に對しては一抹の不安はあるやうであつた。

「お隣同仇敵になつて、お互に幸福である筈がないではないか。日本にしても、四億の民からにくまれて好いことはない筈ではないか。英、佛、蘇の離間中傷から離れて支那は自分自身の判斷に返らなければならない。そして日支兩國協力してアジアをアジア人のアジアにしなければならない。アジアを平和と繁榮と文化の理想郷にしようではないか。英佛蘇の

諸國はアジアが強くなることを嫌つてゐるのだ。さうなければアジアが自分達の食ひ物でなくなるからだ」

　武雄は諄々とこの若い將校に説いた。この丈の低い將校は、賛意を表するやうなことは表はさなかつたが、至つて冷静に、至つて眞面目に武雄の言を一句洩らさじと聽いてゐるやうに見えた。

　武雄と石蘭もこの將校こそと見込んだ。事態はどうなるか解らないが、この日の戰闘は全然失敗でないことだけは確かであつた。

　「この二人を監禁せい。縛らんで好い」

丈の低い將校はかう命じて、室を出た。

　二人は監禁室に導かれた。小さな室であつたが土間ではなかつた。床が酷く汚れてゐて埃も溜まつてゐた。石蘭は掃除をしたいと思つたけれども箒も雜巾もなかつた。石蘭はハンカチでやつと二人が横になれるだけの廣さのところをはらつて、そこに武雄を坐らせ、そして、自分は、ハンカチを眞黑にして蜘蛛の巣を拂い窓の小さい硝子戸を拭いた。併し汚れがひどくて外がはつきり見えなかつた。

「やつと自由な身體になつたね。石蘭、宮城の方はどちらか」

と武雄は起き上がつた。

　石蘭はいそいそと髪を撫で、衣紋を正して武雄の左側によりそつた。

「どつちが明るいか」

「何だかちつともはつきりしないのよ」

「仕方がない。こつちを東と思つて遥拜しよう」

　二人は最敬禮をした。

　石蘭はいつまでも頭を垂れてゐたかつた。あふれる涙をふかうともしなかつた。二人は並んで冷たい床に坐つた。

「こゝへ來てから一月も經つたやうな氣がするね」

　武雄は寂しく笑つた。

「本當に」

　石蘭は急に兄の忠植や文江のことを思ひ出した。血塗れの負傷兵達の姿も眼にちらついた。

「水が一杯ほしいな」

　武雄は今までになく寛いで、創だらけの顔を撫で廻はしながらだだつ子のやうな調子でいつた。

「頼みませうか」

　石蘭が立ち上らうとするのを、武雄は止めて、

「いゝよ。みつともない。食事のときには呉れるだらう」

「でも、喉が渇いちや」

「なに、一生懸命に喋つたためだらう。今に唾液が出るさ」

「本當に、さつきのお話しは上手でしたわ」

「さうか。おれはお前こそうまいと思つたよ。何言つてゐるのか解らないけれどもね、調子がとても好かつたよ。きいてるやつの表情が見えなくて殘念だな。本當に盲目は情ないと思つた。それに、おれは、まだ盲目のほやほやだらう。第六感とかいふやつが發達してゐないからさつぱりだめだ。しかし誠は必ず通ずると信じてゐるよ」

「さうね。私大丈夫と思ふわ。あの人たちとても熱心に聽いてましたわ。矢張師長は桁が違うやうでしたよ。さうさうあの默れと呶鳴つた人ね。とても神經質な人よ。痩せつぽちでしょつちゆう眼がきらきらしてゐる人。とても怖かつたわ」

「さうか。おれもあの男屹度痩せてゐるなと思つたよ」

「さう？　それから、あの、おしまひまで残つてゐた人ね、あれはどう？」

「あれは背が低いんぢやないか」。

「よく御存知ね」

石蘭は笑つた。

「顔は黒いだらう。眼は小さくて」

「その通りよ。そしてね、とてもしつかりして居たわ」

「やつぱりお釋迦様の言葉に間違はない」

「何んのこと？」

「いや。眼があるから見えるのぢやなくて、心に見る力があるから眼が出來ると言ふのだよ。五官は相通ずるんだつてね。聲を聽けば形が解るつて言ふわけだらう。僕も盲目になつて悟が開けたのかな」

　武雄は朗らかに笑つた。

「あたしも嬉しいわ」

　石蘭はしばらくしてから突然かう言つた。

「何が嬉しい？」

「何んだか分らないけれども」

「嬉しい新婚旅行だとでも思つてゐるのか」

　武雄は手さぐりで石蘭の手を握つた。

「それより以上よ」

「明日のことは分らないぞ。こゝがこの世での最後の宿といふわけかも知れないぞ。明日は銃殺か」と武雄は靜かにいつた。

「それで結構。すばらしいぢやありませんか」

　二人ともしばらく無言であつた。烏がかあかあ鳴いてゐるのが聞えた。

　突然、武雄は石蘭の手をしつかりと握りしめて、

「石蘭」

と呼んだ。

「はい」

　石蘭は武雄を見上げた。武雄の見えない眼からは涙が流れて居た。石蘭は武雄の言葉を待つてゐたが、言葉を待つ必要のないことを悟つた。

　二人はいつまでも彫塑のやうにぢつとしてゐた。（つづく）（『緑旗』昭和14年7月号）[[5]](#footnote-5)

1. 『緑旗』1940年3月号から7月号に連載された。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「こきおろし」と読む。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 「聢と」は「しかと」と読む。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 「犒ふ」は「ねぎらう」と読む。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 次号に掲載はなく、未完で終わっている。 [↑](#footnote-ref-5)